

ボランティア活動によって構築される関係：陸前 高田市での参与観察から

著者	桑原 恭平
著者別名	KUWAHARA Kyohei
ページ	1-42
発行年	2017-03-24
学位授与年月日	2017-03-24
学位名	修士(国際文化)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://hdl.handle.net/10114/13309

修士論文

指導教授 松本悟 教授

論文題名

ボランティア活動によって構築される関係
ー陸前高田市での参与観察からー

国際文化研究科

国際文化専攻修士課程

桑原恭平

ボランティア活動によって構築される関係
—陸前高田市での参与観察から—

国際文化研究科 国際文化専攻 修士課程
桑原恭平

本研究の目的はボランティアと受け入れる側が活動を通してどのような関係を築き、その関係は時間の経過とともにどのように変化するかを明らかにすることである。そして、その関係の構築と変化が受け入れる側に与える影響を考察する。その際、本研究ではマルセル・モースの贈与論を1つの分析軸とした。

1995年の阪神・淡路大震災以降、ボランティア活動を行う人が増加しているなかで、ボランティアをめぐる問題が指摘されるようになった。1つはボランティアのやる気のなさやマナーの悪さ、もう1つはボランティア活動が拒否されるケースである。前者は学校教育の現場などで起きており、研修や指導あるいはボランティア活動の意義を認識することで解決に向かう可能性が指摘されている。一方後者の問題は災害現場などで取り上げられることが多い。特に非があるわけではないボランティアが被災者から支援を断られるケースが報告されている。本論文では前者と違い具体的な解決策の見えにくい後者の問題に焦点をあてる。

拒否されるボランティアについては贈与論の観点からの研究が行われてきた。モースは、贈与と交換のシステムには「与える義務」「受け取る義務」「お返し義務」の3つの道徳的義務があり、この3つの義務が循環することで当事者同士の関係が安定するという。贈与論の見方をすれば、被災者がボランティアを拒否するのは一方的に与えられるからであり、「お返し」が被災者の精神的な負担を軽減し、ボランティアと受け入れ側の間の潤滑油となって関係をよくすると指摘されている(内尾 2013; 坂田 2014)。しかし、本当にそれだけでボランティアの拒否という問題は解決し、効果的な活動につながるのか。贈与の重要性を論じる先行研究は、震災直後の比較的短い期間に作られる関係に焦点を当てているが、最初の関係作りや、一度作られた関係が長期的にどう変化するかはほとんど論じられていない。本研究では贈与論があまり着目してこなかったボランティアと受け入れ側の関係構築の始まりから、関係が安定した後の変化を明らかにしていく。

研究方法是事例研究とし、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市で震災直後から現在まで継続してボランティア活動をしている特定非営利活動法人 NICE のプログラムを取り上げた。ボランティア活動のスタート時期が明確で、今日までボランティア活動をしているため両者の関係構築と変化を追うことができるからである。活動が始まった頃については複数の関係者へのインタビュー調査によって、4・5年が経過した時点でのボランティアと受け入れる側の関係については3ヶ月間の参与観察によって分析した。

結論をまとめると以下の通りである。

震災直後、詐欺や泥棒の被害があったことから、陸前高田市で活動するボランティアは住民に信頼されないということもあった。それに対してはボランティアが真摯に活動する姿勢を示すことで地元理解者が生まれ、その人を「仲介者」として少しずつ関係が広がっていった。その下地をもとに支援を受け入れる力＝「受援力」を高めるため積極的に贈

与の関係を構築していった。贈与と同じようにボランティアと受け入れる側の対等な関係を作る効果を果たしていたのが「傍に寄り添う」という姿勢である。ボランティアがあからさまに何かをしてあげるという態度を出さずに被災者の近くで話を聞いていることが、受け入れる側との対等な関係を作っていた。

しかし、次第にボランティアが受け入れる側からの返礼に申し訳なさを感じるようになった。そこでボランティア活動以外の「お返し」を受け入れる側にすることで両者が一層信頼関係で結ばれるようになった。モースの指摘する贈与の循環が関係を安定させたといえる。

長期的な活動が贈与の循環を作り、両者が良好な関係を築いていくことでボランティア活動は円滑に進んだ。その一方で、関係が強まることによって閉鎖性が生じ、その輪に入ることができない人が現れることも明らかになった。贈与が作り上げる関係は支援を必要とする全ての人を包摂するわけではないのである。

長期的に支援が行われ復興段階に入ると、ボランティア活動と労働が重なり合う時がある。先行研究では競合を避けるためにボランティアは撤退すべきだという指摘もあるが、NICE は活動を続けている。その意味を参与観察から分析すると、作業内容が極めて類似していたとしても、それを競合や補完と考えるのではなく、果たしている役割の違いと捉えるのが適当である。

本研究は受け入れる側と NICE の職員の視点から両者の関係構築とその変化を明らかにしたため、実際に活動していたボランティアの視点が不十分であるということは否定できない。しかし、贈与論を使った既存のボランティア研究の不足を補い新たな見方を示すことができた点で意義があったといえる。

目次

序章 拒否されるボランティアへの疑問	1
第1節 ボランティアをめぐる問題	1
第2節 贈与論から見たボランティア	2
第3節 研究方法	4
第4節 論文の構成	4
第1章 東日本大震災後の陸前高田市	6
第1節 陸前高田市のボランティア活動の実情	6
第2節 災害時のボランティア活動の特徴	8
第3節 調査の手順	9
第2章 震災直後からのボランティアと受け入れる側の関係	12
第1節 ボランティアと受け入れる側の関係の始まり	12
第2節 ボランティア活動を通して関係を維持できる人とできない人	13
第3節 傍ににいることの重要性	18
第4節 外国人ボランティアの派遣の始まり	20
第5節 個人に対する活動と団体としての活動	22
第6節 引き継がれる繋がり	24
第3章 安定した状態のボランティアと受け入れる側の関係	27
第1節 過去の蓄積の上にある関係	27
第2節 繰り返される贈与と交換	28
第3節 良好な関係のなかで起きたトラブル	30
第4節 ボランティア活動と労働の違い	32
第4章 ボランティアと受け入れる側の関係の構築と変換の考察	35
参考文献	37

序章 拒否されるボランティア¹への疑問

第1節 ボランティアをめぐる問題

現在、多くの人がボランティア活動を行っている。総務省が行った 2001 年、2006 年、2011 年の社会基本調査²によると、どの年も 1 年間に推計でおよそ 3000 万人がボランティア活動³をしたことがあるという。

多くの人がボランティア活動を行っているなかで、そのボランティアをめぐる指摘されている問題がある。その 1 つはボランティア活動をする児童や生徒のやる気のなさやマナーの悪さである。2000 年以降、小中学校の学習指導要領は道徳⁴、総合的な学習の時間⁵に自然体験や職場体験と同様にボランティア活動などの社会体験を行うことで、児童・生徒の心身の発達や考える力を養うことを奨励している。しかし、山本（2003）はボランティア体験のような社会福祉施設での福祉教育の多くは、その目的や動機付けがあいまいであり、ただ社会福祉施設を訪れてボランティア体験をして終わるだけになっていると指摘する。このような場合、受け入れ先の施設ではボランティア活動に対してマイナスのイメージを抱くようになり、その施設で今後ボランティアを受け入れることが難しくなる（北田

¹ 本論文ではボランティアを、そのように認識される行為をする主体と定義する。一般的にボランティア活動は、自発性・無償性・公共性の 3 つの要素を満たす行為を指すことが多い（中嶋 1999；原田 2000；山本 2005 など）。しかし、実際には、学校教育に組み込まれ義務化されたボランティア活動や、報酬を受け取る有償ボランティアも存在する。そうした人々を排除しないため、本論文ではより広く社会的にそう認識される行為をボランティア活動として扱う。なお、厳密な使い分けは困難ではあるが、主に行为主体をボランティア、行為をボランティア活動と書くこととする。

² 総務省統計局「平成 13 年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/kodo/pdf/vol.pdf>（2015 年 11 月 26 日閲覧）

総務省統計局「平成 18 年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/gaiyou.pdf>（2015 年 11 月 26 日閲覧）

総務省統計局「平成 23 年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf>（2015 年 11 月 26 日閲覧）

³ ボランティアの項目は、まちづくりのための活動、子どもを対象とした活動、安全な生活のための活動、自然や環境を守るための活動、災害に関係した活動、高齢者を対象とした活動、スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動、健康や医療サービスに関係した活動、障害者を対象とした活動、国際協力に関係した活動、その他の 11 項目となっている。

⁴ 道徳とは、総合的な学習の時間と関連させ、道徳的価値を持つ人間としての生き方の理解を深め、それを実践できるようにすることを目標とした授業である。その内容は各学校で異なっている。

文部科学省「第 3 章 道徳」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/dou.htm（2016 年 5 月 9 日閲覧）

⁵ 総合的な学習の時間とは、特定の教科にとらわれず横断的な学習を通して、自ら課題を設定し、取り組んでいくことを目標とした授業である。その内容は各学校で異なっている。

文部科学省「第 5 章 総合的な学習の時間」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm（2016 年 5 月 9 日閲覧）

2001)。埼玉県内の小中学校の児童・生徒、教員、学校長に向けてボランティア活動に対する意識や取り組みを把握するためのアンケート調査を実施した福島（2004）は、児童・生徒はボランティアに関心を持っている一方で、その意味や目的を十分に理解しているとは言えないと指摘している。また、調査した学校全てが何らかのボランティア活動に取り組んでいるが、全体計画や指導計画を立てた上で取り組んでいる学校は半分以下だった。

もう 1 つの問題はボランティア活動そのものが受け入れる側にとって精神的な負担となってしまうことである。これは災害時の緊急救援の例でよく指摘される。日本では大規模な災害がこれまで何度も発生してきたが、その時々で人々の助け合いがあり、災害を乗り越えてきた。そのような災害現場ではボランティアが活躍している。なかでも阪神・淡路大震災が発生した 1995 年はボランティア元年と言われるほどボランティアが注目され、その活躍が日本中に知れ渡った（石井 2010）。阪神・淡路大震災後も火山の噴火や水害、震災などの災害で多くのボランティアが支援を行っている。このような大規模な災害では、ボランティアの存在は被災者の助けとなる一方で、場合によっては被災者にとってボランティア活動が歓迎されないこともある。

スレイター（2013）は東日本大震災の被災地で、自身が実際に参加したボランティア活動中に、被災者に支援を拒否される場面に遭遇した。スレイターは何人かのグループで被災者の家を回り、がれきの撤去などを行っていた。津波によって大量のがれきが庭に散乱し明らかに助けが必要だと思える状況であるにもかかわらず、ある家の住民からボランティア活動を拒否された。それでも半ば強引にがれきの撤去作業を行い、活動を終えて立ち去ろうとした時にその家の住民からボランティアの人数分のカップやグラスを渡された。言葉を交わすことなく渡された「贈り物」は、感謝の気持ちからではなく、見ず知らずのボランティアに借りを作ったままではいけないという心境から譲られたものではないかとスレイターは指摘する。

第 2 節 贈与論から見たボランティア

ボランティアをめぐるこうした問題に関してはすでにいくつかの先行研究がある。マナーの問題については、前節で述べたように学校など半ばボランティア活動を強制する主体が指導計画を立てて管理することは一定の効果があると考えられるもののボランティア活動の意義を損ないかねない。これに対してコーリヤ佐貫（2000）は別の角度からこの問題に光を当てている。カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の日本語授業のアシスタントとして参加したボランティアがなぜ長期にわたって活動を続けるのかを研究したところ、自らの語学力の向上や日本語教師としての練習など当初は自己利益から始めたボランティア活動が、授業アシスタントを続ける中で受益者である現地の学生に役に立つことを第一に考えるようになったと結論付けている。指導や管理といったボランティアの自主性を失いかねない方法でマナーの問題を解決するのではなく、ボランティア活動そのものの意義がボランティアの姿勢に変化をもたらす可能性を示している。

では後者の問題はどうか。前者と違いボランティアに非があるわけではない。一見すると、被災地に駆けつけ誰かの助けになろうとするボランティアと、大規模な災害によって非常に困難な状況に陥っている被災者のニーズはかみ合いボランティア活動として成立するように見える。しかし、実際には、ボランティア活動を受けることが精神的な負

担となってしまうことがある。明らかに支援が必要な状況だけに何もしないわけにもいかず、かといって何かをすれば受け手の心に重荷を背負わせることになりかねない。前者の問題に比べて具体的な解決策が見つけにくい。本論文ではこの問題に取り組む。

これについては贈与論の観点からの研究が行われてきた。贈与論の泰斗であるモース（2014）は、贈与と交換のシステムは3つの道徳的義務、すなわち「与える義務」「受ける義務」「お返し義務」が介在していると指摘した。3つの道徳的義務が循環することによって人間関係が安定するのであり、いずれかが欠けることによって関係は不安定になる。前節で取り上げたスレイターの疑問を、内尾（2013）は贈与論の立場から説明する。東日本大震災後の三陸地方をフィールドに調査と支援活動を行う内尾は、被災者が全国から集められた支援物資を受け取ることに精神的な負担を抱えていたという。なぜなら、支援物資は匿名の贈り物であり、贈り主に感謝を伝えること、すなわち「お返し」ができないからである。そこで被災者は被災地で活動するボランティアに使いきれない支援物資を譲ることで、精神的負担を解消しようとした。その結果、ボランティアと被災者の距離は近づき、ボランティア活動の関わりだけでなく、日常的な交流も行われるようになったと指摘している。スレイターのケースは「匿名」の支援ではないので、直接グラスやコップを「お返し」できたことになる。同じように東日本大震災の被災地である宮城県の離島でボランティア活動をしながらフィールド調査を実施した坂田（2014）も、被災者である島民がボランティアに渡す手土産を受け取ることが「贈与の義務を果たし、不均衡を解消するシステムとして機能していた」（坂田 2014：199）と分析している。

先行研究から述べたように、支援が必要な状況下で必ずしもボランティアに非がなくても受け入れが拒否されるような問題については、ボランティアに対する「お返し」が精神的な負担を軽減し、ボランティアと受け入れる側の間の潤滑油となって関係をよくすることが複数の文献で指摘されている。しかし、本当にそれだけでボランティアと受け入れる側が信頼関係を形成・継続し、効果的な支援活動につなげることができるのだろうか。実際、スレイターはいぶかしい気持ちでがれきの片づけをした家を離れ、その後の関係構築には至っていない。

贈与論の立場から書かれた文献は、比較的短期間の、しかも支援を始める段階での人間関係の構築に焦点を当てている。よそ者が、善意の気持ちを抱えて被災地など支援を必要とする土地にやってきた時に、逆に贈り物をもらうことに戸惑う。その現象を説明し、乗り越える方法を示唆するという意味で贈与論の視点は重要である。内尾（2013）や坂田（2014）が指摘する通りである。その一方で、ボランティアと受け入れる側の間では、贈与論だけでは乗り越えられない問題も生じるだろうし、人間関係が形成され支援が軌道に乗った後に生じる両者の問題をうまく説明できない。

この点について坂田（ibid.）は、贈与による関係構築の重要性を指摘した内尾の研究には、「お返し」が行われるまでの過程や、その後の両者の関係についての長期的な視点が欠けているとした上で、ボランティアと被災者の関係構築を2年間に渡って追いかけた。その結果、ボランティア団体と被災者たちという集団同士の関係から、ボランティア個人と個別の被災者の関係に変化していったと説明している。しかし、坂田もその間に両者の間で生じた問題が何で、集団から個人の関係に変化することによって問題の防止や解決につながったのか、また、その変化を再び贈与論に立ち返って考察してはいない。そこで本

研究では、ボランティアと受け入れる側の関係を、贈与論を1つの分析軸に据えた上で、5年間という長いスパンで両者の関係の構築と変化を捉えていく。それによって、ボランティアが受け入れ社会にもたらす影響を明らかにしていく。

第3節 研究方法

本研究ではボランティアと受け入れる側がボランティア活動を通してどのような関係を築き、その関係はどのように変化していくのかを明らかにしていく。そのためには具体的な事例を丁寧に追いかける必要がある。そこで筆者は日本や海外でボランティアの派遣、ボランティアプログラムの主催を行っている特定非営利活動法人 NICE⁶（以下、NICE）の東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市でのボランティアプログラムを調査対象とした。

東日本大震災の被災地を調査地とした理由はいくつかある。1つ目は、未曾有の大災害によって現地の人々の暮らしが破壊され、明らかに外部の支援が必要だと考えられる点である。2つ目は、震災発生という支援を必要とするスタート時点が明確で、ボランティアと受け入れる側の関係を最初から追うことができる点である⁷。3つ目は、被害の大きさからボランティアの関与が比較的長期間必要とされる点である。本研究では、ボランティアと受け入れる側の最初の関係構築だけでなく、その後の変化にも着目するため、短期間の緊急救援で撤退できる状況になかった東日本大震災を事例とした。

NICEの陸前高田市でのボランティアプログラムを選択した理由は、震災直後から今日までボランティアを現地に派遣して活動を継続的に行っていることである。緊急救援から復旧、復興までどのようにボランティア活動が行われ、その時々で行われたボランティアと受け入れる側のやりとりの具体的な内容を知ることができるからである。長期間にわたって関与している団体の活動を研究することによって、ボランティアと受け入れる側の双方にどのような変化があったのかを明らかにすることができる。

事例研究という方法を取りながら、本研究ではインタビューと参与観察を行った。

インタビューを行う理由は、東日本大震災から既に5年以上が経過しており、震災直後の状況などを知るためには、当時どのようなボランティア活動が行われていたのかを知っている人物に話を聞く必要があるからである。参与観察を行う理由は、筆者自らが陸前高田市での NICE のボランティアとなることで、インタビューで明らかになった状況が現在どうなっているのかを日常の些細なやり取りのなかから感じ取り両者を比較できると考えたからである。インタビューと参与観察を行うことで、陸前高田市での5年以上のボランティア活動がどのように行われてきたか、ボランティアと受け入れ側の関係はどのように変化してきたかを明らかにする。

第4節 論文の構成

第1章では、調査地である陸前高田市が東日本大震災によってどのような被害を受けた

⁶ NICEは1990年の設立から国内・海外95か国でボランティア活動を行っている。教育や福祉、文化、環境など幅広い分野の活動を行っている。

⁷ ただし、厳密に言えば NICE は東日本大震災以前にも陸前高田市でボランティア活動を行っていたことがあり、その時の関係が影響を与える可能性は否定できない。

のか、また、陸前高田市でのボランティア活動の実情や実施にあたっての困難などについて、行政資料などをもとに論じる。その上で、具体的なインタビュー対象者と参与観察の対象について説明する。

第2章では、大震災発生後から、陸前高田市での NICE の活動が軌道に乗るまでの間の経緯を、ボランティアと受け入れる側の関係に着目し、インタビュー結果をもとにひもといっていく。震災が起きた 2011 年 3 月 11 日から 2015 年 6 月に参与観察を始めるまでの陸前高田市でのボランティア活動がどのように行われてきたのかを時系列に整理し、それに沿ってボランティア活動の変化や、受け入れ側との関係を論じる。その際、当時の NICE のボランティアが書いたインターネット上のブログ記事や文献、行政側の震災の記録などの資料によって事実関係を補完する。

第3章では、陸前高田市での NICE の活動がすでに安定期に入っていた 2015 年 6 月から 8 月までと 2016 年 7 月に筆者が行った参与観察の結果を報告する。先行研究や震災直後の活動と比較しながら、活動開始から 4 年～5 年を経た段階でのボランティアと受け入れる側の関係を分析する。

その上で、最終章の第4章では、本研究の結論として、ボランティア活動と贈与によって構築される関係、「仲介者」が果たす役割、更には支援が長期化するなかで問われるボランティア活動と労働の違いについて述べる。

第1章 東日本大震災後の陸前高田市

第1節 陸前高田市のボランティア活動の実情

本節では、本研究の調査地である岩手県陸前高田市が東日本大震災によってどのような状況になったのかを整理する。

表1 東日本大震災の被害状況 (総務省消防庁 HP⁸より筆者作成)

		陸前高田市	被害総数
人的被害	死者	1,602 人	19,475 人
	行方不明者	204 人	2,587 人
	負傷者	不明	6,221 人
住家被害	全壊	3806 棟	121,744 棟
	半壊	240 棟	279,107 棟
	一部破損	3984 棟	744,238 棟

表1は、総務省消防庁のHPに載せられている2016年9月1日時点の東日本大震災の被害状況を整理したものである。陸前高田市は岩手県内の市町村のなかで最も被害を受けた市であり、日本全国の市町村のなかでも、人的被害においては2番目⁹に甚大である。

全国社会福祉協議会¹⁰が発行した東日本大震災の災害ボランティアに関する報告書¹¹では、東日本大震災が起きてから翌年1月までの間で特に被害の大きかった岩手県、宮城県、福島県の3県で災害ボランティアセンター¹²に登録したボランティア総数をまとめている。その報告書によると、3県で合計926,200人、岩手県だけでも328,700人がボランティアとして現地に赴いている。また、同期間の陸前高田市のボランティア総数は90,697人である。

陸前高田市のボランティア総数は岩手県を訪れたボランティア総数の4割弱を占めている。これだけ多くの人々がボランティアとして陸前高田市を訪れているが、実際に活動する

⁸ 総務省消防庁「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）被害報【最新】」

<http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/154.pdf> (2016年12月19日閲覧)

⁹ 最も人的被害を受けた市町村は、宮城県石巻市であり、被害状況は死者3,551人、行方不明者425人、負傷者不明となっている。

¹⁰ 社会福祉協議会は民間の社会福祉活動を推進することを目的とした民間団体である。市区町村単位、都道府県単位で設置されており、都道府県社会福祉協議会の連合会として全国社会福祉協議会が設置されている。

全国社会福祉協議会「社会福祉協議会とは」

<http://www.shakyo.or.jp/about/index.htm> (2016年12月24日閲覧)

¹¹ 全国社会福祉協議会「東日本大震災 災害ボランティアセンター報告」

http://www.shakyo.or.jp/research/2011_pdf/11volunteer.pdf (2016年12月20日閲覧)

¹² 災害ボランティアセンターは社会福祉協議会が災害発生時に開設し、被災地のニーズの把握や支援を行うと同時に、支援を希望する個人や団体の受け入れ調整などを行う。

全国社会福祉協議会「災害時のボランティア活動について」

<http://www.shakyo.or.jp/saigai/katudou.html> (2016年12月24日閲覧)

にはいくつかの困難があった。岩手県が 2013 年に発行した『岩手県東日本大震災津波の記録』には次のように述べられている。

ボランティアが被災地、特に陸前高田市を含む太平洋沿岸地域で活動するには 2 つの問題があった。第 1 に、地理的な特性である。岩手県の沿岸地域は通常でも内陸から車で 2 時間以上かかる地域があり、場所によっては道路が一本しか通っていない地域もある。その道路が地震や津波によって寸断され、被災地に入ることのできない状況であった。

第 2 に、宿泊する場所である。ボランティア活動を行う際の宿泊場所を沿岸の被災地域で確保することは困難であった。そのため、沿岸地域よりも被害の小さい内陸で宿泊場所を確保しそこから沿岸地域に通わなければならないのだが、第 1 の理由で述べたように内陸から沿岸地域までの交通事情の悪さや燃料の不足などの問題があった。

これらは沿岸地域に見られる問題であるが、加えて陸前高田市は震災発生からしばらくの間は更に 2 つの問題を抱えていた。

第 1 に、コーディネート能力の低下である。通常、災害が起きた時は社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを設置し、訪れたボランティアを各現場に配置していく。しかし、陸前高田市の社会福祉協議会は震災によって事務所や関連施設の全壊だけでなく、会長、事務局長をはじめとする組織の中心人物が多数犠牲になってしまったのである。そのため、災害ボランティアセンターの運営が危ぶまれたのではないかと考える¹³。第 2 に、被災者が持つボランティアに対する不信感である。被災地では、泥棒や詐欺などの被害があり、被災者はボランティアを受け入れることに抵抗を感じたと指摘されている¹⁴。

以上のように、陸前高田市を含む沿岸地域全体に見られる問題と市独自の問題の両方がボランティア活動を困難にしたと考えられる。

このような状況で、沿岸地域では震災からしばらくは外部からの支援は制約を受けており、地元の人たちが中心となってボランティア活動を行っていた。震災から 13 日後の 3 月 24 日には東北自動車道路が開通したが、物資や宿泊場所の不足からボランティアが駆け付けるには厳しい状況だった。4 月からは少しずつボランティアが訪れるようになり、県内の各災害ボランティアセンターはゴールデンウィークに向けて受け入れ態勢を強化し始めた。8 月には夏休みなどの休暇を利用して岩手県内では月毎の合計で最多となる 48,231 人がボランティアとして訪れた。このうち、約 3 分の 1 のボランティアは陸前高田市で活動した（岩手県 2013）。

震災直後の主なボランティア活動は、津波によって浸水した家屋の泥だしや片付けなどの清掃や炊き出し、支援物資の配布などであるが、8 月以降は、避難所から仮設住宅への入居のサポートなどの活動が行われた。陸前高田市ではこれらの活動に加え、畑の整備や枯れ木の伐採なども行われた。

東日本大震災によって甚大な被害を受けた陸前高田市では上記のような形でボランティア活動が行われた。そのような災害時のボランティア活動にはどのような特徴があるのかを次節で説明していく。

¹³ 陸前高田市の災害ボランティアセンターには外部から 21 団体、7,761 人（2012 年 2 月時点）が協力を駆けつけ運営に協力した（岩手県 2013）。

¹⁴ 被災者は側溝の泥だしやがれきの撤去などを行うボランティアの姿を見たことでボランティアの必要性を感じ、被災者の抵抗は薄れていった（岩手県 2013）。

第2節 災害時のボランティア活動の特徴

被災地でのボランティア活動は平時に行われるボランティア活動とは違い、次の4つの特殊性がある（前林 2012）。

第1に、必要とされるボランティア活動の内容がその時その場所に変化していくことである。被災地で必要とされる活動は、被災現場や避難所、仮設住宅などその活動場所が異なると同時に、日々変化していく。第2に、安全確保である。震災の場合には建物の倒壊やがけ崩れなどの危険性があり、がれきの撤去などでも予期せぬ怪我をする可能性もある。その時、現地の病院が被災している時はすぐに治療できるとは限らない。被災地のボランティア活動は常に危険と隣り合わせであり、グループ単位で活動しお互いに安全を確認しあうことが必要である。第3に、ボランティア活動を自己完結する必要がある。被災地では物資が不足している可能性がある。ボランティアは活動に必要な道具や食料などを自分でまかない、被災地の物資をボランティアが使わないようにする必要がある。第4に、被災者に対する配慮である。ボランティア活動では、初めて会う人と意気投合し仲間同士の活動から楽しくなることが多いが、そのようなボランティアは家や家族を失っているかもしれない被災者を傷つける可能性がある。活動中だけでなく自由時間などでも、被災者を第一に考えた行動が必要である。

被災地でのボランティア活動は被災者を中心として行われるとしても、被災者全体を見るか被災者一人ひとりを見るかで対応の仕方が異なる。澤（2007）は2004年11月に起きた新潟中越地震のボランティア活動に参加した経験から、全体を見るか、一人ひとりを見るかは対立しやすい関係であると指摘する。ボランティアが被災者に対して公平に支援を行おうとすれば被災者全体に支援が必要になるが、一方で被災者はそれぞれ被害の大きさや必要な支援などが異なる。被災者全員に公平な支援をしようとする被災者がそれぞれ持つ事情を無視することになるが、被災者それぞれに合わせた支援を行うと被災者全体に支援がいきわたらない可能性もある。

前林（2012）や澤（2007）は災害時にはどのようなボランティア活動が求められるかを指摘している。しかし、必ずしも両者が指摘していることが災害時に求められるとは限らない。渥美（2005）は災害現場には「即興」が求められると指摘する。ここでいう「即興」とは「安定した規範が一時的にせよ遠のいた時に、その場その場の状況に応じて、人々が一時的な規範を生成・更新し続ける過程」（渥美 2005：31）である。つまり、災害によって生じた非日常的な状態ではその時々で何が正しいのかが変化し続けるのだと考えられる。

陸前高田市の状況は渥美（2005）の指摘する「即興」が起きていたと考えられる。例えば、ボランティアに対して不信感を持つ被災者が多かったことから、直接的な支援ではなく側溝の泥だしやがれきの撤去など間接的な支援を行うことで被災者から信用を得られるようにしたことなどである。

NICEも同じく「即興」のなかでボランティア活動を行ってきたと考えられる。どのくらいの期間支援を行うか、被災者とどのようなかわり方をするかなど、ある程度の方針はありながらも、具体的にどのようにボランティア活動を行うべきかはその場その場の「即興」であったと考えられる。筆者が調査を行った2016年の時点もNICEは陸前高田市でボランティア活動を続けているが、その「即興」には成功だけでなく、いくつもの困難やト

ラブルもあったはずである。なぜなら、「即興」が「人々が一時的な規範を生成・更新し続ける過程」（渥美 2005：31）であるならば、NICE もその規範に対応していく必要があり、その過程で NICE と被災者の間で時には意見の食い違いが起きていたことも考えられるからである。

次節では、本研究の調査をどのように行ったのかを具体的に説明する。

第3節 調査の手順

調査の目的は NICE のボランティアが受け入れる側とどのようなやりとりをし、関係を築いてきたのか、その関係の始まりから明らかにすることである。そのために、インタビューと参与観察を行った。なお、インタビュー対象者の名前はイニシャルで表記した。

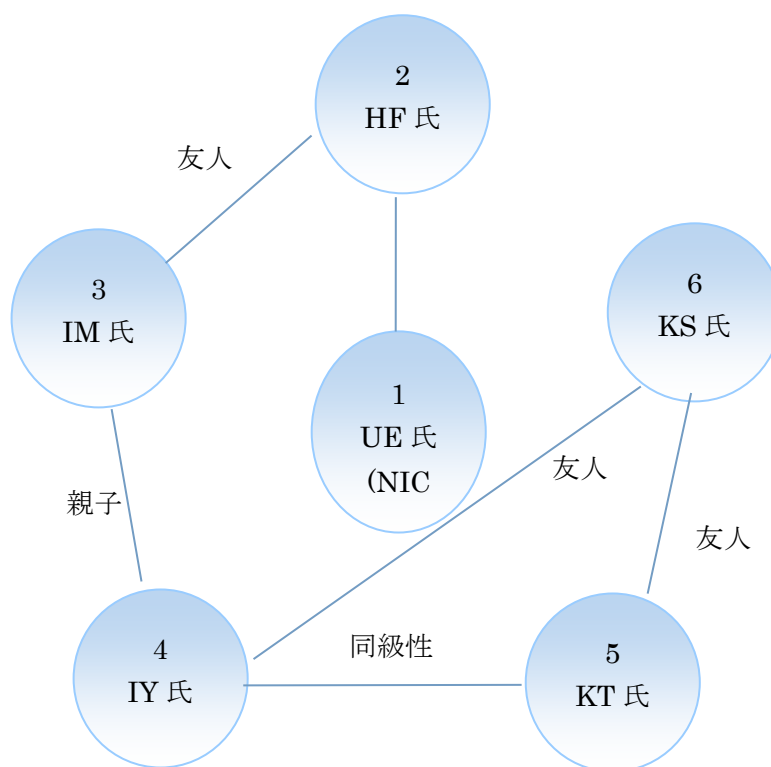


図1 紹介されたインタビュー対象の関係図

東日本大震災の発生から、筆者が参与観察を行った 2015 年 6 月までの関係については、インタビュー調査によってどのような関係を構築し変化したのかを明らかにせざるをえなかった。震災当時の NICE のボランティアがどのような活動をしていたのかの経緯を知っている人で、NICE と受け入れる側の双方の話を聞く必要があった。はじめに、陸前高田市でのボランティア活動がどのようなものであったのかを把握するために、陸前高田市のボランティアプログラムを統括している NICE の職員である UE 氏に 4 回約 4 時間にわたる

インタビューを行った。UE 氏へのインタビューによって陸前高田市でのボランティア活動のおおよそを把握することができたので、筆者は UE 氏から当時陸前高田市社会福祉協議会のデイケアスタッフであり、震災後は陸前高田市災害ボランティアセンターで活動していた HF 氏を紹介された。震災後、陸前高田市災害ボランティアセンターが、ボランティアの受け入れ窓口を担っており、その縁で HF 氏と NICE は関係があった。その HF 氏からは友人で当時は陸前高田市災害ボランティアセンターのスタッフだった IM 氏を紹介された。IM 氏は陸前高田市災害ボランティアセンターで NICE の対応を行った人物である。IM 氏に次のインタビュー相手として紹介されたのは IM 氏の母親である IY 氏である。IM 氏は新たに NPO を立ち上げるために NICE と直接関わる時間が減ってしまったので、母親である IY 氏にこれまで NICE と IM 氏で行われてきた交流の維持を依頼した。IY 氏からは友人の KT 氏と KS 氏を紹介された。IY 氏が知り合いの手伝いに行くことが多くなったため、これまでの NICE とのかかわりを維持するために 2 人に引き継いだ。その KT 氏からは IY 氏と同じく、KS 氏を紹介された。KS 氏は NICE が松月寺を活動拠点として借りる手助けをした人物であり、NICE が地域からどのように見られているかを知る上で重要な人物であった。KS 氏からはすでにインタビューを行った IM 氏や KT 氏を紹介されたため、KS 氏へのインタビューで飽和状態に達したと考えた。

これ以外に、筆者が直接インタビューをお願いしたのは KR 氏と IH 氏である。KR 氏は NICE が児童館に対する支援を始める際に訪問した児童館のスタッフである。UE 氏のインタビューから、震災の約 1 年半後に NICE は児童館支援を行うことになったと聞かされ、その時の状況を知る人物として KR 氏にインタビューをお願いした。IH 氏は筆者が 2015 年に陸前高田市で参与観察を行った時に、農協管轄の農園で働いていた人である。筆者らはボランティア活動を通して IH 氏と親しくなり、ボランティア活動の休みの日には一緒に出掛けるようになったのだが、それが原因で起きたトラブルについて何うためにインタビューを依頼した。UE 氏以外とはそれぞれ 1 回、約 1 時間を目安にインタビューを行った。

東日本大震災から 2015 年初めまでの NICE と現地との関係についてはこのインタビュー調査と、NICE が 2011 年 4 月 6 日に開設し、2016 年の時点でも継続している「NICE・ナイス・東日本大震災復興特別ワークキャンプ」というブログを中心に明らかにする。このブログは、NICE のボランティアが陸前高田市を中心に現地の様子やどのような活動を行っているのかを発信しており、インタビューではわからない部分を明らかにすることができる考えた。一方で、直接現地での人々の関係を観察するため、筆者自身が NICE のボランティアとして 2 度陸前高田市に入り、修士論文の研究に使うことを告げた上で参与観察を行った。具体的には 2015 年 6 月 16 日から 8 月 27 日の 2 か月間余りと、2016 年 7 月 1 日から 7 月 29 日の約 1 か月間、合計約 3 か月間である。その間、NICE ボランティアとして陸前高田市で活動したのは筆者を除くと 2015 年はチェコ人 2 名、日本人 2 名、2016 年はチェコ人 1 名、スロバキア人 1 名である¹⁵。加えて、NICE の職員 1 名がボランティアとともに活動をしつつ、日々のボランティアのマネジメント、車の運転、食費・備品購入の

¹⁵ NICE のボランティアプログラムは長期参加者と短期参加者がおり、長期参加者は 1 か月以上、短期参加者は 10 日ほどの参加である。本文中の参加者は長期参加者であり、短期参加者はそれぞれ、2015 年はタイ人 1 名、日本人 1 名、2016 年は日本人 3 名、韓国人 1 名となっている。

会計管理を行っていた。参与観察中の生活の拠点は NICE が借りている松月寺であり、この寺は住職が不在だった。プログラム中はボランティア全員と NICE 職員が自炊をしながら寝食を共にした。

筆者が手伝ったのは、2015 年は主にカキの養殖、農協管轄の農園、近隣住民の農作業、児童館での子どもとの遊びである。2016 年は農協管轄の農園での活動がなくなり、代わりに松の苗の手入れ作業を行った。このなかで、本研究で取り上げる活動はカキの養殖、農協管轄の農園、児童館での子どもとの遊びである¹⁶。加えて、参与観察ではボランティア活動だけでなく、活動以外の筆者らと受け入れる側との交流なども調査の対象とした。その理由は、ボランティア活動以外の日常的なかかわりを見ることで、インタビューでは明らかにできないより詳細なボランティアと受け入れる側の関係を考察することができると考えたからである。

次章では、震災から 5 年以上が経過したなかで、日本人や外国人のボランティア、あるいは NICE の職員と受け入れる側の間でどのような関係が築かれているのか、トラブルなどは生じていないのか、生じたとすればどのように解決しているのか、ボランティアと受け入れる側の関係が浮き彫りになると考えられる出来事を時系列に記述していく。なお、第 2 章では主にインタビューをもとに震災発生時から 2015 年 6 月頃までを、第 3 章では主に 2015 年と 16 年の参与観察中に記録した内容をもとにボランティアと受け入れる側がどのような関係を構築し、その関係はどのように変化してきたのかを論じる。

¹⁶ カキの養殖や農協管轄の農園、児童館での子どもとの遊びは毎週定期的に行われているのに対し、近隣住民の農作業と松の苗の手入れ作業は不定期で数回しか行われず、関係の変化を見ることはできなかったため考察からは除外した。

第2章 震災直後からのボランティアと受け入れる側の関係

第1節 ボランティアと受け入れる側の関係の始まり¹⁷

NICEの陸前高田市でのボランティア活動は1999年頃にまでさかのぼる。当時のボランティア活動は地域おこしの一環としての農業に関する活動だった。しかし、受け入れる側の反応はあまりよくなかった。理由は、その頃、陸前高田市が受け入れていたグリーン・ツーリズム¹⁸と呼ばれる農業体験とNICEのボランティアの違いからだった。グリーン・ツーリズムはボランティアというよりも旅行という意味合いが強い。そのため、訪れた人は宿泊や観光などを通して陸前高田市に直接経済的な効果をもたらすが、NICEのボランティア活動では宿泊場所や食事などを受け入れる人々が提供することになっている。この違いから受け入れる人々の一部はNICEに対して、なぜNICEのボランティアを受け入れる時は宿泊場所や食事などを用意しなければならないのかと疑問に思うこともあった。また、2003年にはNICEのボランティアと受け入れる側の間に何度かトラブルがあり、NICEはその年の活動を最後に陸前高田市から撤退した。

それから8年後、2011年3月11日に起きた東日本大震災をきっかけに再びNICEと陸前高田市の関係はスタートしたが、決してスムーズに始まったわけではない。震災後、NICEは東北地方で関係のある人や団体に安否確認の電話を行ったが、陸前高田市には2003年に撤退していたためすぐに電話をかけることができなかった。それでもUE氏がかつての現地協力者（以下、A氏）に連絡をしてみると是非来て欲しいという反応だったため、NICEは3月25日に陸前高田市に向かった¹⁹。UE氏はA氏を足掛かりに陸前高田市で活動しようと考えていたが、当のA氏は支援活動の真っ最中であり、「自分がNICEを受け入れる余裕はない」と言われた。それでもなんとかならないかと話し合いを重ね、A氏は2003年にNICEのボランティアを受け入れた関係者の家を宿泊場所として用意した。

宿泊場所を確保できたことが、NICEが陸前高田市で活動を再開する決め手となった。東北地方では被害の規模があまりに大きかったため、ボランティアの受け入れ能力の問題が真剣に論じられていた。なかでも陸前高田市は前章で述べたように災害ボランティアセンターを設置する社会福祉協議会の会長、副会長をはじめ、役員の人たちの多くが犠牲にな

¹⁷ 特に断りがない限り、この節の情報源はUE氏へのインタビューからである。

¹⁸ グリーン・ツーリズムとは農村漁村地域で地元の人たちとの交流を楽しむものであり、都市と農村の人々がお互いの魅力を話し合い、人やモノの行き来を活発にする活動である。陸前高田市では、地元の農業や漁業の体験をするとともに、観光地などを訪れるといったことを行っていた。

農林水産省「グリーン・ツーリズム都市と農村漁村の共生・対流」

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/index.html (2016年11月9日閲覧)

¹⁹ NICEが東日本大震災直後に震災復興としてボランティア活動を行ったのは陸前高田市だけではなく、福島県の会津若松市でも避難所の運営に関わるボランティアを行った。陸前高田市と会津若松市はこれまで少なからずNICEと関係があり、NICEは全く関係のない地域でボランティア活動を始めるよりも、活動しやすいと判断しその2つの市でボランティアを行った。ただし、NICEは2003年のトラブルで陸前高田市から撤退していた経緯からコンタクトを取るべきか議論があった。UE氏は再び陸前高田市でボランティア活動を行うことに少なからず不安を抱いていた。

っていた（社会福祉法人陸前高田市社会福祉協議会 2016）。加えて、陸前高田市内にはボランティアが泊まれるような施設はなく、ボランティアを行うならば内陸側から沿岸地域の陸前高田市に通うという方法をとる必要があった。このような状況のなかで、NICE は少しでも繋がりがあるところで活動でき、なおかつ陸前高田市のなかに拠点を置けることが必要だった。宿泊場所の確保はその意味で重要な契機となった。なお、以前トラブルが原因で撤退した NICE が陸前高田市で再びボランティア活動を行うことを気にする地元の人から NICE に連絡があった。UE 氏はその人に対し、陸前高田市では現地の協力者を通じて活動していくことなどを丁寧に伝え、相手から理解を得た上で、4 月 11 日から陸前高田市でボランティア活動を始めた。

ボランティアの研修²⁰を行う時間的余裕がなかったことから、派遣されたメンバーはこれまでに NICE のボランティアに参加したことがある女性 3 人、男性 1 人と上田氏の 5 人であった。5 人は宿泊場所として A 氏が用意してくれた地震により半壊状態の家を拠点としてボランティア活動を始めた。

第 2 節 ボランティアと関係を維持できる人とできない人

NICE は 4 月 11 日からの約 1 か月半の間に 2 回拠点を変えている。拠点の移り変わりは NICE が直面した最初の問題であると同時に、NICE がどのような考えで地域の人々と関係を持ったのかが見えてくる。

1 つ目の拠点となる家で民泊させてくれた人（以下、B 氏）は、2003 年まで NICE が陸前高田市でボランティア活動を行っていた頃に受け入れていた人の関係者である。この家を拠点とし、NICE は近隣住民の家を訪ね、泥にまみれた食器洗いからボランティア活動を始めた。ボランティアが書いた当時のブログによると、食器洗いだけでなく、側溝の掃除や避難所の受付なども行っていた²¹。

NICE は可能な範囲で地域の人々にボランティア活動を行っていたが、次第に特定の個人に対するボランティア活動へと変わっていった。NICE が民泊していた家の物置小屋に 60 歳ぐらいの女性（以下、C 氏）が借り住まいをしていた。NICE がボランティア活動をしていた場所では農業用の湧水が出ており、近隣住民はその湧水を使い掃除をしていた。C 氏も近隣住民と同様にその湧水を利用し掃除を行っていた。その姿を見たボランティアは、C 氏を積極的に手伝うようになり、他の人へボランティア活動をする時間がなくなっていった。すると、近隣住民からの見られ方も変わってしまった。

²⁰ NICE では事前研修をプレワークキャンプと呼んでいる。プレワークキャンプでは、ボランティア活動をするにあたって、NICE のボランティア活動はどのようなことを行うのか、ボランティア活動中にどのようなことに気を付ければよいのか、NICE の職員や NICE のボランティア経験者に質問したり体験談を聞いたりする。

NICE 「プレワークキャンプ ～NICE 事前研修～」

http://www.nice1.gr.jp/topics_detail9/id=4844（2016 年 12 月 24 日閲覧）

²¹ NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「4/15 成長痛」、2011 年 4 月 15 日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/81cd048e0d07db33e29843d83909ed1a（2016 年 10/2 参照）

だんだん、C さん（筆者注：実際のインタビューでは個人名であるが、筆者の方で変更）の家しか行けなくなってしまうと、そうすると、地域で「C さん家のボランティアね」って言われ方をして、支援を受けている C さんだけが浮いてしまったんですよね。²²

NICE は陸前高田市でボランティア活動をしている時、緑色のジャンパーを着て活動していたことから近隣住民の一部から「緑のボランティア」と呼ばれていたが、C 氏への支援が活動の中心になるにつれ「C さんのボランティア」と呼ばれるようになった。NICE は被災者全体のボランティアというよりは、一個人のためのボランティアと認識されるようになってしまった。

また、NICE が B 氏の家で民泊をしているという状況はボランティア活動を行う上では問題があったと UE 氏は語る。

民泊していると、民泊している B さんに引っ張られるんですよね、活動が。情報が全部民泊の B さんから入ってくるから（中略）私たちは情報だけでなく判断もその民泊の B さん頼みだったんですよね。そうすると、やっぱ色がつくんですよね。²³

B 氏の家で民泊している状況では、B 氏とのかかわりが強くなり、B 氏から活動する場所などの意見をもらうことが多かった。UE 氏は民泊させてもらっている以上、その意見を無視することはできず、B 氏の考えに沿うことも何度かあった。しかし、それでは NICE として独自にボランティア活動をしているとは言えない状況であった。

NICE は東日本大震災に対するボランティア活動を 1 年や 2 年で終わらせるのではなく、10 年は続けるつもりでいた。そのためには、UE 氏はボランティア活動をする地域で公平な立場として存在する必要があると考えた。C 氏のように特定の個人に対してだけボランティア活動が集中すれば、その他の人々からは反発が生まれボランティア活動を受ける個人だけでなく、NICE もボランティア活動をやりづらくなってしまう。また、上記のような個人のバイアスのかかった情報源は NICE のボランティア活動を制限してしまう可能性もある。

そんな時、コンテナハウスをもらえるという話があがったため、NICE は 4 月下旬頃に拠点を民泊からコンテナハウスへと変更した。NICE は受け入れる側に直接左右されずボランティア活動を行えるようになったが、その一方で、コンテナハウスで生活するボランティアは電気、水道が通っていない状態で活動していた²⁴。震災当時ボランティアセンターのス

²² UE、2015 年 11 月 30 日、NICE 全国事務局にて。

²³ UE、2015 年 11 月 30 日、NICE 全国事務局にて。

²⁴ NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5/7 満天の星空から」、2011 年 5 月 7 日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/56aef06b303955a48741d0b0402246e1 (2016 年 10 月 5 日閲覧)

NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「八戸出身の私ができること」、2011 年 5 月 12 日

スタッフとして活動し、NICE の対応をしていた IM 氏は NICE のボランティアの生活を次のように話す。

山奥にコンテナハウスがあって、あれ、これ俺よりもひどい生活してねえかみたいな。（中略）ひどいというか真っ暗ですし、何も見えない状況でご飯なんか作ってて、これはかわいそうだなって思っ²⁵て。

IM 氏は NICE のあまりの生活状況の酷さからどこか生活できる場所はないかと探したところ、住職のいない松月寺の存在を知り、松月寺の役員である KS 氏に NICE を紹介した。そして、NICE は 2011 年 5 月 23 日にコンテナハウスから松月寺に引っ越した²⁶。このような過程を経て NICE は松月寺を拠点としてボランティア活動をするようになった。

NICE のボランティアをはじめ、現地で活動するボランティアは災害ボランティアセンターで登録を済ませたあと緑色のジャンパーを着てボランティア活動を行っていた。しかし、その緑色のジャンパーを着たボランティアのなかには、昼間は活動しているように見せかけて、実際はあたりを物色し、夜になると「火事場泥棒」として活動していた人もいた。そのことについて、KS 氏は次のように述べる。

ボランティアの恰好をして、ちゃんとあれだよ緑のジャンパーを着て、まあ結局ボランティアセンターさ入ったら、そういう服装にして、だされるんだけどけれども、ボランティア活動はしない。しないというか、昼間はあんまり活躍しないのさ。夜になると活躍する人たちが結構いたんでさ。うん、だから、まあ、がれきのなかにあるバッグで開いてないバッグはなかったそうです。遺体のなかにも、時計、まあ時計はまあ狂ってしまうが、指輪とか、ネックレスとかはほとんど外されてた。（中略）で、消防団が遺体探しをして、自衛隊が収容したわけだ。消防団は見つけた遺体さ、ここにありますよって目印を立てたわけだ。ね、で、自衛隊はその日のうちに全部終わんないと、目印がついたまま残っているでしょ。それを夜活躍する人たちがね。²⁷

がれきのなかにあるバッグや遺体の指輪やネックレスなどの装飾品は、そのような「火事場泥棒」によって盗まれたのだと考えられる。同様に、松月寺の隣に住んでいる KT 氏も次のように述べる。

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/5c7db0748e4562e33ca4c651c63165e0（2016 年 10 月 5 日閲覧）

²⁵ IM、2016 年 6 月 9 日、一般社団法人マルゴト陸前高田事務所にて。

²⁶ NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5 月 23 日（1 日目）」、2011 年 5 月 25 日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/4428ca37edc8e40ae183803f69ce12bf（2016 年 10 月 5 日閲覧）

²⁷ KS、2016 年 7 月 25 日、KS 宅にて。

震災でさ、あの、その、火事場泥棒みたいなやつがさ、この辺でも歩いていたらしいんだ。（中略）震災、津波の次の日あたりから、その辺の家をな、流されてきた家とか、田んぼのなかにあるわけだ。そこにさ、なんていうか、何か金目のものを探して歩いているというような人が何人かいたらしいんだって。²⁸

両者は実際に「火事場泥棒」を見かけたのではなくあくまで伝聞であるため、本当にいたと断定することはできないが、実際には前章でも述べているように、陸前高田市では震災直後から泥棒や詐欺の被害が報告されているのも事実であり、被災者はボランティアに対して不信感を抱いていた（岩手県 2013）。

そうした状況のなかで、IM氏は自身も不信感を抱きながらもボランティアと被災者が関係を作っていけるようにボランティアの手配を行った。

不信感たるやすごかったっていう状況のなかで、あの、もうボランティアを送る部分で、同じ人とか同じ組織を同じ場所についでいう意識を持っていたんですよ。要はその人自身が何回も通うと仲良くなるんですよ。顔見知りになると。で、仲良くなったら、その人たちはいい人たちだから安心だって思ってもらえるような関係性さえつくっておけば、うーんと、地域の人たちも受け入れてくれてさらには派生効果〔ママ〕も出てくるかなっていうのもあって。²⁹

IM氏が述べているように繰り返し同じところで活動することでボランティアは少しずつ受け入れる側と関係を築いていったと考えられる³⁰。一方で受け入れる側が感じていた不信感はどうのように解消されたのか。岩手県（2013）では、ボランティアの地道な活動を見かけた受け入れる側が次第に警戒心を解いていったのではないかと指摘している。また、IM氏のような陸前高田市の災害ボランティアセンターのスタッフがボランティアと受け入れる側の間に立つことで、不信感が薄れていったということも考えられえ。

UE氏は災害時にボランティア活動を行うためには、一般的には地域のなかで支援を受ける力＝「受援力」を高めることが必要だと述べる。「受援力」とはボランティア活動などを受けることに対してひきめを感じさせず支援を抵抗なく受け取ってもらう力である。「受援力」を高めるためには、ボランティア活動を通して少しずつ相手にボランティアのこと

²⁸ KT、2016年6月15日、KT宅にて。

²⁹ IM、2016年6月9日、一般社団法人マルゴト陸前高田事務所にて。

³⁰ ブログには、被災者との交流やボランティアが子どもに勉強を教える場面など、ボランティア活動だけでなく、日々の交流についても書かれている。

NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「4/16 折り返し」、2011年4月16日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/48fcfd356e45dc5414c8fb9ac94704e（2016年11月25日閲覧）

NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5/3 それぞれの旅立ち」、2011年5月3日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/e8300bb32e460544f7ca16eb497adcc1（2016年11月25日閲覧）

を知ってもらい、信頼されると同時にひきめを感じさせないためお互いに対等な関係であることが求められる。その理由は、相手を一方的に助けることはボランティアに対して心苦しさを感じさせ、ボランティア活動に対する抵抗を生みだしてしまうからである。ボランティアが相手と対等な関係であることでその心苦しさを感じさせずに済む。NICE はIM 氏を始め、被災者とかかわりを持つ時は「受援力」を高められるようなかかわり方をしていたと考えられる。その一例が、頂き物である。NICE はボランティア活動中に受け入れる側から頂いたものなどは断ることなく受け取っている。決して何かを一方的に与えるのではなく、相手からの返礼を受け入れることで受け入れる側の気持ちを汲み取ろうとした。また、受け入れる側との雑談なども「受援力」を高めるためには必要だと考えている。ボランティア活動中のかかわりだけでなく、活動以外でも受け入れる側との関係がつくられることで、支援を受けることの抵抗を減らすことができるという。

NICE はこのようなやり方で地域の「受援力」を高めながら対等な関係を作ると同時に、IM 氏のようにボランティアと受け入れる側の間に立つ「仲介者」も両者が関係を構築するためには重要な役割があったと考えられる。NICE のボランティアは「受援力」と「仲介者」の存在によって受け入れる側と関係を構築できたのだと考えられる。

そういうのがあって、どんどん受け入れられていった。で、（筆者注：NICE が）活動している様子を見て、地域の人たちも、まあ、口だけ偉そうなことと言っても、結局行動が伴わないと信用してもらえないじゃないですか。その分、行動してたと思うんですよ NICE って。³¹

そして、IM 氏はKS 氏に NICE に松月寺を貸してくれないかと紹介した。その時のことを KS 氏は次のように語る。

そうですよほら、IM が、連れてきたから、たぶん見に来たのかな、それで俺が呼ばれて、で、それじゃ、そうならば、俺（筆者注：松月寺を）借りてやるよと、で、まあ、IM を信用したのさ。³²

KS 氏は知り合いである IY 氏の息子（IM 氏）の紹介であったことから、NICE を信用することにした。つまり、「受援力」だけで KS 氏と NICE の信頼関係が作られていたわけではない。NICE と受け入れる側の関係はまだ道半ばであったと考えられる。それでも NICE は徐々に地域に根を下ろし、ボランティア活動ができるようになっていた。しかし、次に述べるように地域に根付いてきたことで NICE を知る人々の考えに左右されるようになってしまった。

NICE は最初の拠点の B 氏の家でボランティア活動をしていた時から、ある人（以下、D 氏）へのボランティア活動をしていた。D 氏への活動は NICE が松月寺を借りてからも続いたが、NICE が松月寺を借り地域に根を下ろし始めると次第に受け入れる側内部の関係性

³¹ IM、2016 年 6 月 9 日、一般社団法人マルゴト陸前高田事務所にて。

³² KS、2016 年 7 月 25 日、KS 宅にて。

が見え始めた。NICE がボランティア活動を通して関わっていた人々のなかには D 氏との関係があまりよくない人々がいたのだった。松月寺を借りている状況で D 氏に対するボランティア活動を続けるかどうかは長期的な支援を目指す NICE にとって難しいところであった。結局 NICE は D 氏へのボランティア活動は自分たちのように地域に根を下ろしておらず、長期的な活動を考えていない個人のボランティアなどに対応してもらえるように災害ボランティアセンターに取り次いだ。それ以降、NICE と D 氏とのつながりはなくなったのである³³。

NICE のボランティアは受け入れる側との信頼関係を作る上で、一方的な行為とならないように相手からの返礼を受け入れていた。「受援力」とはまさに内尾 (2013) や坂田 (2014) が言うところの不均衡解消方法としての贈与である³⁴。すでに序章でも述べたが、贈与と交換のシステムには 3 つの道徳的義務がある。その 3 つの道徳的義務が循環することで人間関係は安定し、いずれかが欠けることで不安定になる。「受援力」はボランティアと受け入れる側がスムーズに道徳的義務を果たすための要素だと考えられる。しかし、それだけではない。震災直後の「火事場泥棒」のような出来事によって、「受援力」だけでは KS 氏のようにすぐには信用されないということもあったと考えられる。そのような状況に対して、IM 氏はボランティアを同じ受け入れる側に何回も送り関係を築けるようにした。IM 氏のように、現地でボランティアと受け入れる側の間に立つ「仲介者」によって関係がスムーズに構築されたと考えられる。

一方で、ボランティアと受け入れる側が繰り返しボランティア活動を重ね、次第に良好な関係になっていくなかで、D 氏のようにボランティアにとっては何ら問題を抱えていない人との関係を見直さざるを得ないという問題が生じているのも事実である。「受援力」や「仲介者」によってボランティアと受け入れる側はスムーズに関係を構築できたが、それらは D 氏のように個別に発生する問題には対応しきれないこともあると考えられる。

第 3 節 傍にいたことの重要性

NICE は陸前高田市でボランティア活動をしていくなかで、NICE 独自には被災者が何を求めているのかを調査しなかった。通常、NICE のようなボランティアの派遣、あるいはボランティア活動を主催する団体は活動を行う地域で何が必要とされているのかを調べ、どのような形でボランティア活動を行うのかを考えていく。しかし、東日本大震災のような大規模災害ではそのような活動は被災地の混乱を招く可能性があるとして UE 氏は語る。

地域のニーズに応えなきゃいけないみたいなこと、すごい言われてるんですけど、一方で私は、それすごい批判的に思っていて。なんでかって言うと、みんな聞き取り調査やってたんですよ。ニーズ調査から始めます、みたいな。だから、10 個の団体が来たら、10 個の団体がニーズ調査を始めるんですよ。そうしますと、誰々さんが最初に団体に困りごとありますかって言ったら、これとこれとこれがな

³³ D 氏への支援が個別に行われたかどうかは不明である。

³⁴ ここでは、NICE のボランティアが具体的にどのような「頂き物」を受け取っていたかは書かないが、その詳細については次章で筆者による参与観察の結果として詳述する。

い、みたいな、こんなことで困っている、そしたらまた次の団体がやってきて・・・
(以下、略)。³⁵

UE 氏の語るニーズ調査とは、被災者がどのような活動を求めているのかを支援者が把握しようとする行為である。被災地でそれぞれのボランティア団体が独立して活動した場合、UE 氏が語るように、そのような行為は被災者にとって負担となってしまう可能性がある。その負担を避けるために、NICE は被災地の状況や被災者が何を必要としているかなど様々な情報が集まる陸前高田市災害ボランティアセンターとともに活動した。

行政資料（陸前高田市 2014）によると、2011 年 3 月 12 日から市内の学校給食センターの敷地内で市職員がボランティアの受付をはじめ、同月 15 日に陸前高田市社会福祉協議会に受付業務が引き継がれた。そして、同月 17 日に陸前高田市社会福祉協議会職員によって、災害対策本部が設置されている学校給食センターに災害ボランティアセンターが開設された。その後、同月 23 日に陸前高田市社会福祉協議会は災害ボランティアセンターを臨時で借りた市内の自動車学校内に移転し、翌 4 月 23 日に陸前高田市横田町に移転した。

通常、災害時は各市町村にある社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを設置し、運営を行う。陸前高田市社会福祉協議会も同様の運営形態だった。しかし、陸前高田市社会福祉協議会は地震や津波により事務所や関連施設などが全壊、流出し、多くの職員が犠牲になった（社会福祉法人陸前高田市社会福祉協議会 2016）。陸前高田市社会福祉協議会も大きな被害を受けており、被災者がどのような状況であるかを把握しきことは困難であったと考えられる。このような状況で NICE のボランティアは、災害ボランティアセンターとともに活動し、被災者の支援や訪れたボランティアを被災者の要望に合わせて配置するマッチング作業を行った。その NICE のボランティア活動を当時陸前高田市災害ボランティアセンターで対応していた IM 氏は次のように述べている。

よく言ってたのは、10 人いて、作業に来ましたと、家の人と作業しましたと。で、10 人いて、7 人話相手になりました、そのお宅の人と、3 人は作業しましたと。全然終わりませんでした、それでいいですと。その 7 人と話すことによって、話すことでストレス発散したりとか、気持ちを整理したりとか、そういう効果がやっぱりあったりする。（中略）そういう意味では、NICE さんっていうのは、すごく、陸前高田市の人たちのニーズをうまく汲み取って、やってらっしゃったなと。³⁶

被災地でボランティア活動を行うにあたっては IM 氏の発言のように、何か作業をするだけでなく相手と話をすることが求められる。前節で取り上げた「受援力」を高めるための被災者との雑談もこれに近い。渥美（2005）は被災地でボランティアを行う時にはただ被災者の傍に寄り添うことが重要であると指摘する。その状態を渥美は端的に「ただ傍にあること」と表現する。それは「何らかの救援活動を展開できる災害ボランティアであっても、まずは無条件に被災者の傍にあって、被災者の声（それはため息だけかもしれ

³⁵ UE、2015 年 11 月 31 日、NICE 全国事務局にて。

³⁶ IM、2016 年 6 月 9 日、一般社団法人マルゴト陸前高田事務所にて。

ない)を聴くことから具体的な活動へと移っていく」(渥美 2014: 68) ことである。渥美は被災者は突然の災害に何が必要であるのかをうまく把握しきれない状況のなかで、ボランティアあるいは誰かが被災者の「ただ傍にること」で、ふとした瞬間に被災者が口を開き会話が生まれ何が必要であるかを考え始めると指摘する。

IM 氏が「NICE は陸前高田市のニーズをうまくくみ取っていた」という発言は、渥美の指摘する「ただ傍にること」からボランティアが被災者の求めるものを見つける手助けをしていたのだと考えられる。しかし、だからと言って NICE のボランティアが最初から「ただ傍にること」をしようとしたとは考えがたい。NICE が発信している東日本大震災のブログのなかで、ボランティアとして被災者とどういのかかわりが求められているのかの葛藤について書いている人もいる。

できることは何でもしたいという思いが先行しますが、何でも手を出していると、「してもらって当たり前」という気持ちを生み出しかねない。それに、私たちがいつまでもその人個人を支援できるわけでもない。目先の問題を軽減するために、その人の自立力や、地域のバランスを崩してしまうのでは全く意味がない。その人の生活がずっと、ずっとそこで続いていくことをきちんと意識して、長い目で冷静に判断する必要があると、実感を伴って再認識しました。³⁷

ブログを書いた当時のボランティアは活動をしていくなかでどうすれば役に立てるのかを模索している様子が伺える。NICE のボランティアが初めから IM 氏が述べているような活動ができていたかは定かではないが、結果として被災者にとって望ましい活動になったと考えられる。

災害時のボランティア活動はいかに被災地に負担をかけないように活動を進めていくかが重要である。その活動は何らかの目に見える行為だけではない。突然の災害に立ち尽くす被災者の傍で、ただ一緒にいることや雑談をすることも必要である。ボランティアからするとそれは活動と呼べるのかと思うかもしれないが、被災者からすればそのようなかかわり方をするすることで自身の状況を整理することに繋がる。災害時のボランティア活動にはがれきの撤去や家屋の掃除といった活動だけではなく、足を止めて被災者と寄り添うことも必要である。

第4節 外国人ボランティアの派遣の始まり

東日本大震災に対して、世界中から多数の支援が寄せられた。外務省³⁸によると、2012年12月28日の時点で日本は民間団体、個人を除く128の国や地域、機関から支援物資や

³⁷ NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「4/16 折り返し」、2011年4月16日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/48fcfd356e45dc5414c8fb9ac94704e (2016年10月5日閲覧)

³⁸ 外務省「諸外国等からの物資支援・寄付金一覧」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/saigai/pdfs/bussisien.pdf> (2016年12月1日閲覧)

寄付金を受け取った。また、一般社団法人国際開発センター³⁹が行った 2011 年 3 月 11 日から 2012 年 3 月末までの約 1 年間を対象とした東日本大震災の海外からの支援実績の調査⁴⁰によれば、日本が海外から受けた人的支援⁴¹は 160 件であった。加えて、日本の国際協力 NGO のネットワーク団体である JANIC によると 60 以上の団体が主に岩手県、宮城県、福島県、茨城県の沿岸地域で活動し、500 以上のプログラムを被災地で実施した⁴²。陸前高田市では 7 団体ががれきの撤去や支援物資の提供、子どものメンタルヘルスケアなどの活動を行った⁴³。NICE も同様にがれきの撤去などのボランティア活動を行っていたが、JANIC の集計には含まれていない。

東日本大震災後、NICE に対して海外からボランティアの申し込みは相当数きていたが、当初は日本人ボランティアに限って派遣していた。6 月下旬頃になってようやく日本語を話せる外国人のボランティアを陸前高田市に派遣し始めた。その理由は、陸前高田市ではまだ外国人のボランティアが活動できるほど整った状況ではなかったが、日本語を話せる外国人ならばボランティアとともに活動する NICE 職員が現場で外国人ボランティアの通訳にならず日々の活動の運営に専念できると考えたからである。

日本語を話せる外国人ボランティアの派遣が始まってから 3 か月後の 9 月下旬、国際交流基金日米センター（以下、日米センター）⁴⁴の助成金をきっかけに NICE の外国人ボランティアの派遣は拡大する。

東日本大震災のあった 2011 年は NICE に対して多くの支援が寄せられた。日米センターの助成金はその 1 つであり、プロジェクトの実施が条件であった。プロジェクト⁴⁵の内容は外国人ボランティアが活動を通して地域の人々と交流をすることであった。そして、9 月

³⁹ 1971 年に設立された日本初の開発、国際協力分野専門の政策提言などを行っている組織。一般社団法人国際開発センター「IDCJ の概要/組織図」

<http://www.idcj.or.jp/about/index.html> (2016 年 12 月 1 日閲覧)

⁴⁰ 一般社団法人国際開発センター「東日本大震災への海外から支援実績のレビュー調査」

<http://www.idcj.or.jp/pdf/idcjr201201.pdf> (2016 年 12 月 1 日閲覧)

⁴¹ 人的支援は捜索・救助、医療、被災者支援、支援調整、人的交流、原発事故対応の 6 つのカテゴリーにわけている。

⁴² JANIC「日本の国際協力 NGO の被災地支援」

<http://www.janic.org/activ/earthquake/map/index.php> (2016 年 12 月 1 日閲覧)

⁴³ ブリッジエーシアジャパン、シャンティ国際ボランティア会、ハビタット・フォー・ヒューマニティジャパン、ピースウィンズジャパン、セーブ・ザ・チルドレンジャパン、国境なき子どもたち、難民を助ける会。

JANIC「日本の国際協力 NGO の被災地支援」

<http://www.janic.org/activ/earthquake/map/index.php> (2016 年 12 月 1 日閲覧)

⁴⁴ 国際交流基金日米センターとは、世界中で日本との国際交流を行うことを目的とした独立行政法人国際交流基金の内部組織の 1 つである。国際交流基金日米センターは特に日米間での協力のもとに世界中の人々と交流を行っていくことを目的としている。

国際交流基金日米センター「日米センターとは」

<http://www.jpf.go.jp/cgp/about/index.html> (2016 年 10 月 20 日閲覧)

⁴⁵ プロジェクトの正式名称は、被災地復興ネットワーク・特別国際ワークキャンプといい、期間は 2011 年 8 月 1 日から 2012 年 3 月 31 日までである。

国際交流基金日米センター「日米センター事業報告」

http://www.jpf.go.jp/cgp/info/report/report_05.html (2016 年 10 月 20 日閲覧)

23 日からこのプロジェクトのもとで、日本語を話せない外国人ボランティアの派遣が始まった。

被災地は海外から支援物資や寄付金、ボランティアなど多くの支援を受け取った。贈与論からすれば支援を受けた人々は何らかのお返しをする必要がある。しかし、内尾（2013）が述べているように支援物資や寄付金などは匿名の贈り物であり、贈り主に感謝を伝えることができない。内尾はそのような状況に対して被災者は被災地で活動するボランティアに使いきれない支援物資を譲ることで、精神的負担を解消したと指摘する。一方でスレイター（2013）はこれまで大規模災害の際に日本から緊急援助を受けてきた国の人たちが、いわば返礼として東日本大震災の被災地を支援したと捉えている。確かに開発途上国から多額の募金や支援物資が贈られた点ではスレイターの指摘は的を射ている。しかし、筆者とともに陸前高田市のボランティア活動に参加していた人のなかには先進国の若者も少なくなかった。スレイターの指摘だけでは説明できない。参与観察中、筆者とともに活動した外国人ボランティアが陸前高田市を選んだ理由は東日本大震災の被災地だからということもあるが、むしろ日本に対する興味関心からであった。タイのような開発途上国から来たボランティアも同様である。日本の援助に対する返礼という贈与の関係からだけでは捉えきれない側面があると考えられる。

この頃のボランティア活動はあくまで震災復興としての活動であり、外国人だからこそできるボランティア活動は少なかったと考えられる⁴⁶。では外国人だからこそできるボランティア活動とは何か。それを含めて次節では個人に対する活動と団体としての活動を論じる。

第5節 個人に対する活動と団体としての活動

2012 年以降、被災地でのボランティア活動が進んできたことで、災害ボランティアセンターにあがってくる要望は次第に被災者の個別のものに変化してきた。NICE はこれまでの災害ボランティアセンターにあがってくる要望への対応から、独自にその要望を探して陸前高田市でボランティア活動を行うようになった。

しかし、これでは初期の C 氏へのボランティア活動と同様に特定の誰かを対象としたものになってしまうと考えた UE 氏は、個別的な要望であっても特定の個人向けではないボランティア活動を行う必要があると考えた。そして、2012 年 8 月、NICE は陸前高田市の隣にある大船渡市の児童館の子どもを対象にしたボランティア活動を始めた。そのボランティア活動は「世界の遊び」⁴⁷を子どもたちと一緒に行うことである。当時 NICE のボランティアを受け入れ、2016 年の時点でも児童館のスタッフとして働いている KR 氏はその時のことを次のように述べている。

⁴⁶ NICE は日本国内でのボランティア活動を外国人と一緒にすることを重視している。その理由は、国を超えた人々の繋がりを作りながら問題を解決していくことを目的としているからである。そのため、震災直後の状況であっても外国人ボランティアの派遣にこだわっていた。一方で被災地のボランティア活動は被災者を中心に活動を行う必要があるのも事実である。このような葛藤があるなかで、本文中で述べたように NICE は日本語を話せる外国人ボランティアの派遣に踏み切ったのだと考えられる。

⁴⁷ 「世界の遊び」は参加している外国人ボランティアから彼らの国、独自の遊びを日本人のボランティアが教わり、子どもたちと一緒にその遊びをする。

外国人の方々と一緒に 12、3 名でいらして、それで外国の遊びを紹介してくれたんですね。そこが始まりです。（中略）あの必ず外国人の方も、何人か来るなかに外国人もいるっていうので、やっぱりこう、日本とは違う文化とか人とかね、子どもたちが触れ合ういい機会だと思ってましたし。⁴⁸

2015 年の筆者の参与観察からの視点であるが、外国人ボランティアがいることによって、筆者のような日本人のボランティアが子どもたちとの距離を縮められることもあった。KR 氏が働いている児童館には外国人ボランティアが来る前に何度かボランティアとして訪れたことがある。その時にはあまり話しかけてこなかった子どもが外国人ボランティアが来てからは通訳をしてほしいと声をかけてくることがあった。それがきっかけとなり、筆者はこれまで話すことのなかった子どもとも会話をするようになった。外国人ボランティアがいたからこそ生まれた関係は「三陸サイコー復興祭」⁴⁹でも見られた。イベントの参加者や受け入れる側のなかには外国人ボランティアと写真を撮る人や彼らの存在をきっかけに筆者らに声をかけてくる人たちがいたのである。こうした関係は災害時のボランティア活動から個々の要望に応えるボランティア活動に移行し、加えて比較的安定した状況だからこそ作ることができたと考えられる。

KR 氏は NICE とは児童館で行われた「世界の遊び」の 1 回限りの関係だと考えていたが、NICE の方から今後もボランティア活動を行っていきたいという申し出を受けて、継続的に関わるようになった。本論文を執筆している 2016 年の時点でも、ボランティアが派遣されている期間の毎週土曜日はその児童館で活動をしている。

被災地支援の柱が復旧から復興へと向かっていく状況に合わせて、NICE が 1 人 1 人の要望に地道に対応する活動に移行する選択肢もあったと考えられるが、2012 年頃でも個別的な要望であっても特定の個人向けではないボランティア活動にこだわった。その理由を UE 氏は次のように語る。

我々としては、広くボランティア活動を世界中に広報しているから、その公益性の担保っていうのはすごい大事なポイントで、（中略）1 人の一個人を世界中のボランティアを募集するっていうのは、NICE の仕組み上、リスクが高かったんだよね、だから、そういった明らかに公益とみられるような、活動と、セットにしとかなないと。

50

NICE は陸前高田市のボランティア活動を東日本大震災に対する支援と位置付け、世界各国に向けてボランティアを募集している。その募集で集まったボランティアが特定の個人に対してだけボランティア活動を行うという状況は、果たして東日本大震災に対する支援なのかと疑問を持たれてしまう。UE 氏のこの発言は 2012 年の頃のこと指しているが、そ

⁴⁸ KR、2016 年 6 月 8 日、児童館にて。

⁴⁹ 地元の商店が集まり、出し物や模擬店、踊りなどを行う夏祭りイベントである。筆者らはそのお祭りのスタッフとして会場内の見回りを行った。

⁵⁰ UE、2016 年 3 月 15 日、NICE 全国事務局にて。

それから半年後には NICE は個人向けと団体の個別要望向けの 2 種類の活動を始める。坂田 (2014) はボランティアと受け入れる側の関係が贈与を通して集団同士から個人同士へと変化していくと指摘している。NICE と受け入れる側の関係も同じく、集団同士から個人同士の関係へと変化していったと考えられる。その一方で UE 氏は個人同士の関係が作られることの重要性を理解しつつも、組織の立ち場から集団同士のボランティアの関係も維持しようと団体の個別要望向けの活動も行ったのだと考えられる。

第 6 節 引き継がれる繋がり

NICE にはこれまで陸前高田市でボランティア活動をしてきたなかで特に関係の深い人たちがいる。その人たちは親子、あるいは知人同士であり、彼らのなかで NICE との関係が引き継がれてきた。この関係の引き継ぎが NICE が現在まで陸前高田市でボランティアを続けられた要因の 1 つであると考えられる。

初めに関係ができたのは IM 氏である。災害ボランティアセンターのスタッフとそこに訪れるボランティア団体の 1 つという関係だったが、IM 氏は NICE から陸前高田市について教えてほしいと頼まれたことから、両者の関係に変化が訪れた。第 2 章第 2 節で述べたように、ある雑談から IM 氏は NICE がどのようなところで生活をしているのかを見に行った。コンテナハウスで十分なガスや水道、明かりもないなかで生活している NICE のボランティアを知った IM 氏は、NICE が松月寺を使えるように手配したり、時には自宅に招待し食事を振る舞ったりすることもあった。このころから NICE は IY 氏とも関係を持つようになった。NICE が松月寺に移動する時には、IM 氏と IY 氏は使っていないテーブルや冷蔵庫などの備品を NICE に提供した。

関係の引き継ぎが行われたのは、2011 年 7 月頃、IM 氏が NPO を立ち上げようとした時である。それまで、直接かかわっていた IM 氏と NICE のいわば延長線上に IY 氏との関係があったが、IM 氏が NICE に割く時間がなくなったため、IY 氏に自分の代わりに NICE とのこれまでの日常的なかかわり続けてくれるようお願いした。当時 IY 氏は NICE のボランティアを次のように見ていた。

なんか娘、息子みたいな感じなんだよね、うん。みんなも親しみやすいし、うん。そしてほら、みんなの家に手伝いにいったりしてるんだよね、ありがたいと思うしもちろん。⁵¹

IY 氏は、ボランティアを自分の家族のように見ていたことがわかる。そんなボランティアと親密な関係にあったことで、IY 氏の近隣の住民から不信がられるようなこともあったが IY 氏は意に介さなかった。

最初私は、言われた、近所の人たちに。わけのわかんねえ人泊めてどうしたらね、わけのわからない人をご飯食わせてたり、飲ませてたりって、言われはしました。でも、うちではお父さんも、私も、全然そんな、何気にすることはないって。だって

⁵¹ IY、2016 年、6 月 9 日、IY 氏宅にて。

私だって実家ね、あれだけボランティアに世話になってさ、ボランティアの人ほんとお世話になったんだ。（中略）私、全然拒まないから、来る人誰でも、歓迎。だって、うちの息子たちだって娘たちだって、出かけて行ってお世話になることだってあるんだもんね、だから。⁵²

IY氏のこの発言を贈与の視点から考えてみると、IY氏は実家がボランティアの世話になっていることに対するお返しとしてNICEのボランティアと接していたのだと考えられる。しかも、それだけではなく、IY氏は自身の息子や娘もどこかで誰かの世話になっているかもしれない、そのお返しという意味も込められている。つまり、IY氏はNICEのボランティアとのやりとりだけではなく、より大きな関係のなかで贈与を行っていたと考えられる。

IY氏とNICEの関係が続いていったなかで、2012年6月頃、NICEはIY氏から彼女の姉の畑を借り、その畑で野菜などを自給自足するようになった。その畑でボランティアが作業をしていたところ、突然、それまで全く関係のなかったKT氏が作業を手伝った。IY氏から借りた畑はKT氏の所有しているりんご農園のすぐそばにある。KT氏は時折そこで活動するNICEのボランティアの様子を見ていたそうだが、一向に作業の進まないボランティアを見かねて、彼らを手助けしたのである。そこからKT氏との関係が始まった。当時のことをKT氏は次のように話す。

来た当初から、「こういうことで来たんです」ってこともあればな、その震災直後にさ、そうすればああそうかと理解するんだけど、最初の年は全然わからなかったわけだ。（中略）うん、んだな、あれ（筆者注：IY氏から借りた畑の作業）からだな。（中略）M（筆者注：インタビューでは個人名があがっているため、仮の表記をする）がリーダーでいた時さ、その女の子ができねえんだ。あまりできねえんだな。けども、やろうとする意志がさ。（中略）外国人もいるなかでな、そういうリーダーシップをとって、自分よりも年上のやつらもいたんだって。（中略）こんなにまじめにやる子ら、子どもたちなんだなあと、俺も接するようになったんだ。⁵³

KT氏を通してNICEは地域の人々やKT氏の知り合いなどとの交流会を行うようになった。その交流会によって地域との関係が深まり、子ども支援と同様に個別的な要望であっても特定の個人向けではないボランティア活動が行われるようになった。それがKT氏が会長を務めている北限の茶を守る気仙茶の会（以下、気仙茶を守る会）に対するボランティア活動である。気仙茶を守る会とは東日本大震災によって壊滅的な打撃を受けた気仙茶を守り、未来に繋げていくことを目的とした有志による集まり⁵⁴である。NICEは2012年8月4日から気仙茶を守る会でボランティア活動をしており、その様子が気仙茶を守る会のブログで紹介されている⁵⁵。

⁵² IY、2016年、6月9日、IY氏宅にて。

⁵³ KT、2016年6月15日、KT氏宅にて。

⁵⁴ 北限の茶を守る気仙茶の会「北限の茶を守る気仙茶の会とは」
<http://kesencha.exblog.jp/i2/>（2016年11月10日閲覧）

⁵⁵ 北限の茶を守る気仙茶の会「活動報告（茶園管理）」

筆者は参与観察を行っていた 2015 年 6 月 29 日にこの気仙茶を守る会の試飲会に参加した。KT 氏が会の人たちに新しく参加した NICE のボランティアを紹介し、コーディネーターとして参加している NICE 職員があいさつをしたところ、NICE のことを覚えている人もいた。「うちでボランティア活動をしてくれないか」と声をかけられることもあった。実際にこの時の試飲会がきっかけで同年 7 月 12 日に行われた「三陸サイコー復興祭」というイベントにボランティアとして参加した。

話を戻そう。2012 年 8 月頃、NICE は児童館や気仙茶を守る会などの団体の個別要望向けの活動と個人向けの要望に対するボランティア活動も行うようになった。前節で述べたように、UE 氏は個人同士の関係の重要性を考えつつも、団体として集団同士の関係も維持しようとしたと考えられる。この頃には筆者が 2015 年と 2016 年に陸前高田市で参与観察を行った時に近い、NICE と受け入れる側の関係が出来上がっていたと考えられる。

2012 年、2013 年は NICE との関係は IY 氏と KT 氏が軸になっていた。それが 2014 年になると、IY 氏が別の仕事の事情から NICE の活動に振り向ける時間がなくなったため、全面的に KT 氏が NICE と現地の繋ぎ役を引き受けた。以後、陸前高田市を訪れる NICE のボランティアは KT 氏との交流が活発になり、筆者がボランティアとして陸前高田市を訪れた際も最初に知り合ったのは彼だった。

ボランティアと IM 氏、IY 氏、KT 氏は活動を通して関係が深まっていった。加えて、3 人の間で NICE との関係が引き継がれてきたことで、彼らは新しく訪れるボランティアとも良好な関係を結べるようになったと考えられる。添田（2008）は高齢者の識字学習者に対するボランティア活動を通して、ボランティアと学習者、双方の何らかの贈与によって両者は関係を構築し良好な関係へと変化していくことを明らかにしている。添田の研究はボランティア活動を通してお互いに何らかの贈与があることを示唆している。IM 氏や IY 氏からは備品をもらい、ボランティアは IY 氏に対してボランティア活動をしている。KT 氏とボランティアは交流会などを行い、それが気仙茶を守る会へボランティア活動につながっている。ボランティアと IM 氏、IY 氏、KT 氏の間で明確ではないが断片的にだが贈与の関係があったことは確かであり、その贈与によって関係が深まっていったと考えられる。

一方で、ボランティアとの関係の引き継ぎが家族や友人などの狭い範囲で行われてきたことで、ボランティアと受け入れる側の関係は徐々に閉鎖的なものになっているように見える。次章の第 3 節では、本節と関連してボランティアと受け入れる側の関係の深さによって起きた出来事について述べる。

本章では、東日本大震災が発生して NICE が陸前高田市での活動を始め、現地の受け入れ側との関係が落ち着くまでのプロセスについて、主にインタビュー調査をもとに述べてきた。NICE が陸前高田市でボランティア活動を始めてから約 1 年半から 2 年ほどで、NICE と地域の人々との関係は安定し良好な関係になったと考えられる。その関係は実際にはどのようなものであるのか、また、どのように変化しているのか。その実態をミクロな視点から明らかにするため、筆者は 2015 年 6 月～8 月、2016 年の 7 月の 2 回にわけて合計約 3 か月間参与観察を行った。次章では、参与観察の結果を中心に、活動開始から 4 年以上を経た、ボランティアと受け入れ側との関係をみていく。

第3章 安定した状態のボランティアと受け入れる側の関係

第1節 過去の蓄積の上にある関係

筆者は2015年6月16日にNICEのボランティアとして陸前高田市を訪れた⁵⁶。現地に到着してからは、KT氏をはじめボランティアを受け入れてくれる人々へ挨拶をしに行った。ボランティア活動が始まってからは、その人たちが予想以上に親切にしてくれることに驚いた。休憩時間にはなにかとお菓子や飲み物を勧められ、ボランティア活動を終われば魚介類などの食材をわけてくれた。新しいボランティア⁵⁷が来れば、KT氏の家で歓迎会が行われ、ボランティアが陸前高田市を去る時には送別会が行われた。

NICEと受け入れる側はすでに良好な関係を築いていたと考えられる。筆者はその良好な関係があったからこそ、スムーズに受け入れる側と関係を築くことができた。それだけでなく、参与観察中には過去に訪れたボランティアと受け入れる側の関係が垣間見えることがあった。

2015年7月15日、この日、NICEのボランティアはKT氏宅でKT氏の妻の誕生日パーティを行った。その時、過去にNICEのボランティアだった人たちからの手紙を見せてくれた。KT氏の妻はその手紙の送り主がどんな人なのかを話してくれた。その話がきっかけとなってKT氏宅の一室に案内された。その部屋の壁にはこれまで活動に参加したNICEのボランティアの写真が飾られており、その写真のすぐそばには名前と何年に活動したのかが書かれていた。KT氏の妻はそれぞれのボランティアがどんな人であったのか説明してくれた。かつてのボランティアのなかには個人的にKT氏を訪ねる人もおり、なかには自身の婚約者をKT氏たちに紹介した人もいた。

個人的なかわりにはKT氏とだけではない。大船渡市の児童館でも以前NICEのボランティアとして参加した外国人が個人的に訪れている。

それであの、NICEの、NICEのこうボランティアで、こう2週間ぐらいで来てて、で、1回自分の国に戻って、また来る人もいますよね。自分のその、NICEじゃなくて、自分の意思でまた高田の方に、（中略）そうです、メールが来るんです、来てもいいですかというメールが来るんですよ。⁵⁸

ボランティアを終えた後も続く関係は坂田（2014）の宮城県の離島をフィールドにした研究でも見られる。かつてボランティアとして島を訪れた大学生が就職によって島を訪れることができなくなり、彼らが所属するボランティア団体を通じて島民にメッセージを届けた。坂田の研究とNICEの違いは、直接訪問するかどうかである。坂田の研究では、社会人となり島を訪れることが難しくなった元ボランティアが近況報告という形で島民にメッセージを届けた。一方でNICEでは、バースデイカードのようなメッセージを送るだけ

⁵⁶ 参与観察をするにあたってNICEと受け入れる側にボランティアをしながら研究をしたいと申し出て了承を得た上で行った。

⁵⁷ 筆者は数か月間の長期で陸前高田市のボランティアに参加しているが、10日ほどの短期で訪れるボランティアもいる。

⁵⁸ KR、2016年6月8日、児童館にて。

でなく、直接陸前高田市を訪れて会いに来る元ボランティアもいる。なかには海外から複数回にわたって訪問した人もいた。

このような違いが生まれた理由の 1 つとして次のことが考えられる。坂田の研究では、ボランティアが島民にメッセージを届けることで島外の人との交流の少ない島民を孤立させないようするというねらいがあり、その団体を通じて行われている。メッセージを島民に届けることには団体としての狙いがあったのだと考えられる。ボランティアの自主的な行いとは限らず、むしろ組織的なボランティア活動の延長という側面がある。一方 NICE では、ボランティアと地域の人々の関係は団体を通すことなく続いている。団体を介さず一個人として連絡し訪れるということは、さながら親しくなった友人に会いに行くようであり、個人的な関係が出来上がっていたと考えられる。

第 2 節 繰り返される贈与と交換

2015 年の参与観察中、筆者らと受け入れ側の間で頻繁にモノや食事のやりとりが行われた。そのやりとりを以下の表に整理した。

表 2 ボランティア活動中のモノや食事のやりとり

	誰から	誰に	何を	いつ	どこで
7 月 2 日	H 氏 ⁵⁹ の母	ボラ全員	お茶、お菓子	休憩中	H 氏宅
7 月 3 日	H 氏の父 P H 氏 H 氏 H 氏	P H 氏の父 P N P N ボラ全員	タバコ 〃 カップ麺 ホヤ なまこ カ ニ カレイ	休憩中 〃 昼食中 活動中 帰り際	屋外 〃 休憩所 作業場 〃
7 月 4 日	P N	子どもたち	ケーキ 本	活動中	児童館
7 月 5 日	KT 夫妻 職員 筆者 P N	ボラ全員 KT 夫妻 KT 夫妻	食事に招待 コロケ ティラミス	夕食中	KT 氏宅
7 月 6 日	IH 氏 P IH 氏	ボラ全員 IH 氏 P	お茶 タバコ 〃	活動中 休憩中 〃	農園 〃 〃
7 月 9 日	KT 夫妻	ボラ全員	お茶 お菓子 日本酒 ジュース	夕食後	KT 氏宅
7 月 10 日	H 氏	ボラ全員	魚 カニ	帰り際	作業場
7 月 15 日	IH 氏	ボラ全員	観光案内	休日	陸前高田市 大船渡市
7 月 15 日	ボラ全員	KT 夫妻	食事に招待	夕食中	松月寺

⁵⁹ カキの養殖を行っている漁師。

	H 氏 菊池夫妻 IH 氏 パクト ⁶⁰ P N J ⁶¹	H 氏 IH 氏 パクト 上記全員 〃 〃 〃 〃	カキ モツ焼き トマト 飲み物 自国の料理	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃
7 月 16 日	H 氏	ボラ全員	カキフライ	昼食中	休憩所
7 月 18 日	子どもたち	ボラ全員	お茶	活動中	児童館
7 月 19 日	KT 夫妻	ボラ全員	食事に招待	夕食中	KT 氏宅

表 2 を見ると、ボランティアの個人と受け入れる側の個人、筆者らボランティア全員と受け入れる側の個人、筆者らボランティア全員と受け入れる側の家族など、様々な形でやりとりが行われている。すでに内尾（2013）、坂田（2014）が述べているように、これらの贈与によってボランティアと受け入れる側は良好な関係を築いていった。

坂田（2014）は 2 年間のフィールド調査から、ボランティアと受け入れる側の関係は集団同士から個人同士へ変化するとともに、そのやりとりも同様に変化するという。一方で NICE の事例の場合は、長期的に関係を築いているなかでも集団同士や個人同士、集団対個人など複雑なやりとりが行われている。必ずしもボランティアと受け入れる側の関係は集団同士から個人同士へと変化するわけではないと考えられる。

NICE のボランティアが書いていたブログによると、モノや食事のやりとりは 2011 年 10 月頃から頻繁に行われるようになっていっていることがわかる。その頃はボランティアは受け取ることがほとんどであり、ブログには活動中や帰り際に野菜や飲み物をもらったことが書かれている。ボランティアが受け取ることがほとんどであった理由は、当時はボランティア活動が贈与として受け入れられ、その「お返し」に野菜やお茶などがボランティアに贈られていたからであろう。しかし、ボランティアの目にはもらってばかりであると映っている。

高田でたくさんの方々と出会い、たくさんを知ったり感じたり、たくさんものをいただきました。高田の方で、傷ついていない方は一人もいません。それでも、こんなに暖かい気持ちにさせてくれた皆さんに対して、私はどれだけのものを返すことができたのでしょうか。⁶²

⁶⁰ パクト（特定非営利活動法人パクト）とは 2011 年 7 月に有志によって立ち上げられた NPO 法人であり、陸前高田市でボランティアの受け入れを行っている団体である。パクトは筆者が参加しているボランティア活動とは別の活動で NICE とのつながりがあり、その関係で食事にされた。

⁶¹ P、N はチェコ人、J はタイ人のボランティア。

⁶² NICE-ナイス-東日本大震災復興特別ワークキャンプ「明日から 10 月」、2011 年 9 月 30 日

休憩のたび、食べきれないほどのお菓子、お昼にはおいしいお味噌汁までごちそうしていただきました。本当にいつも優しくてあったかい気持ちをもらってばかり... 私達も少しでもなにか返せてたらいいなあ....⁶³

内尾（2013）は調査中にスタッフの1人が被災者から支援物資を受け取ることに「申し訳なさ」を感じ、受け取りを断ったことに対し、その「申し訳なさ」が「被災者がこれまでずっと支援者に感じてきたことと共通するもの」（内尾 2013:105）であると指摘する。上記のブログを書いていたボランティアの心境がまさに被災者の感じていた「申し訳なさ」である。ボランティアがこのような「申し訳なさ」を感じる理由はボランティアにとってボランティア活動を行うことは自明であり、当然のことをしているに過ぎないからだと考えられる。それにもかかわらず、何らかのお返しを受け取るということはボランティアにとって一方的に贈与されている感覚なのであろう。ブログを書いていた当時のボランティアからすると、受け入れる側から一方的に贈与されていたように思えるかもしれないが、実際は受け入れる側はボランティアの活動に対しての何らかの返礼を行っているのである。

ブログが書かれた2011年と参与観察を行った2015年の贈与を比較すると、受け入れる側の贈与はあまり変わらないが、ボランティアの贈与は活動だけではなくモノや食事なども行われている。2011年は活動が贈与として成り立っていたが、2015年は「申し訳なさ」への返礼によってボランティアは活動だけでなくモノや食事のやりとりを行うようになったのだと考えられる。

第3節 良好な関係のなかで起きたトラブル

ボランティアと受け入れる側はすでに良好な関係を築いている。ボランティアが陸前高田市を訪れたり去ったりする時には、歓迎会や送別会としてKT氏の自宅に招かれ一緒に食事をとることがあった。また、本章の第1節で述べているように過去に訪れたボランティアが継続して関係を築いてもいる。しかし、だからと言って参与観察中に何の問題も起きなかったわけではない。

以下に記すのはIH氏とボランティアが活動を通して良好な関係を築いたことで起きてしまったトラブルである。

2015年、筆者はKT氏が理事を務める農協管轄の農園でボランティア活動をした。その農園でIH氏は働いていた。IH氏はほとんど英語が話せないにもかかわらず、外国人ボランティアに対しても積極的に声をかけ、時には1対1で話している姿も見られた。そんなIH氏と筆者や外国人のボランティアはすぐに親しくなった。

2015年7月8日、その日はボランティア活動が休みだった。IH氏は、一緒に出かけよ

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/479126e0efb9aff5cbcd71e916f2d428（2016年12月26日閲覧）

⁶³ NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「10/19 何か返せるように」、2011年10月19日

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/d0ae0dedb515d5d55285fc4718ced929（2016年12月26日閲覧）

うと筆者らを IH 氏お気に入りの大船渡市の山中にある寿限無亭⁶⁴という高台のログハウスに案内してくれた。そこで、IH 氏はこんな話をしてくれた。

筆者らがボランティアに来る前、IH 氏はほとんど 1 人で割り当てられたビニールハウスで作業を行っていた。アルバイトとして働いている人も数人いるが、それでも作業が追い付かず困っていたところに筆者らがボランティアとして訪れた。筆者らがすぐに作業を覚えこなしていくことで作業が進むようになり、筆者らを見たアルバイトもボランティアに負けていられないとこれまで以上にがんばるようになった。おかげで本当に助かったと話していた。

その後も、IH 氏とは温泉やカラオケに行ったり、再び寿限無亭を訪れたり、良好な関係は続いていった。しかし、ある日を境に IH 氏との関係は終わってしまった。

IH 氏と筆者らは活動が休みの日にしばしば一緒に出かけていた。時には夜遅くまで一緒にいることもあった。そのことに対して NICE 職員は KT 氏から注意を受けた。KT 氏はその時のことを次のように語る。

そこのほれ、農協の出資の会社なわけよ。な、その従業員（筆者注：IH 氏）が事故でも起こしたら大変になるから、うん。ということで、補償問題に発展したらどうすんだべなつてさ。そういうこともあったから、注意したんだ、俺は I 氏（筆者注：NICE の職員）を。なんぼフリーデイ（筆者注：ボランティア活動のない休みの日）でいっても、そんなに、得体の知れないやつと歩いてはだめだよって言ったわさ。⁶⁵

KT 氏は筆者らが出会ってまだ日がたっておらず、どんな人なのかもわからない IH 氏と一緒にどこかに出かけることにに対して注意を行った。同様に KT 氏は IH 氏に対しても注意を行った。その時の注意を IH 氏は次のように語る。

これからもね、ボランティアの人を呼びたいから、あんまりかかわらないでくれって、（中略）あんまり付き合わないでくれって、これから呼べなくなるからって。⁶⁶

KT 氏から注意を受けてから、筆者らは IH 氏と出かけることはなくなり、IH 氏からも連絡が来ることはなかった。NICE はこのような注意を受けたわけだが、仮に KT 氏と NICE が現在のような良好な関係を築いていなかった時に起きていたらどうなったか。NICE は KT 氏から信用されないばかりではなく、KT 氏は NICE が松月寺を借りる際にお世話になった KS 氏と友人同士であるため、KS 氏の信用を無くすこともありえる。その結果、NICE は松月寺の貸し出しを打ち切られた可能性もあったと考えられる。しかし、そのような大きな問題になることはなかった。KT 氏の注意はあくまでボランティアがトラブルに巻き込

⁶⁴ 寿限無亭とは岩手県大船渡市の高台にあるログハウスであり、大船渡湾を一望できる憩いの場所である。

寿限無亭「男の居場所」

<http://www.geocities.jp/pmckw406/>（2016 年 11 月 11 日閲覧）

⁶⁵ KT、2016 年 6 月 15 日、KT 氏宅にて。

⁶⁶ IH、2016 年 6 月 15 日、松月寺にて。

まれないようにするためだった。

やっぱりあれだべ、手伝いさ行ってほら、なんぼでも親しくなればさ、誘われればやっぱいかないわけにはいかないわけだべ。(中略) あとはああいうの(筆者注: IH 氏のこと)にこられっと、ずーっとその、なんだ、付きまとわれることもあるわけだ。それ心配してたんだ。前にもちょっと、その、あったんだ。(中略) 奴ら(筆者注: NICE のボランティア)にすれば地域の人を判断できないわけだ、あの人は悪い、悪いっていうか、いい人で、この人はちょっと、って判断できない部分については俺が、あれはだめだよとか、そういうのをさ、アドバイスしてやんないとね。親代わりとしてよ、だって娘だもの。⁶⁷

KT 氏のこの発言からは NICE との良好な関係が見えてくる。KT 氏は NICE のボランティアを初めて見かけた時は、ボランティア活動をしていることに感心する一方でどこか怪しく感じていた。しかし、何年も関係を積み重ねていくうちにボランティアを自分の家族のように見るようになった。NICE が現在まで陸前高田市でボランティア活動を続けることができた要因の 1 つは、KT 氏のように現地で NICE を支えてくれる存在がいたからだと考えられる。その一方で、KT 氏が筆者らを関係が薄い人から「守る」フィルターとなってしまった可能性も捨てきれない。KT 氏にとっては NICE が危険な目に合わないための配慮だとしても、結果として NICE と人々の繋がりを制限しているという見方でもできる。

この出来事はともすればボランティアの拒否につながるかもしれない問題であったと考えられるが、受け入れる側との関係の積み重ねによって問題にはならなかった。しかし、その積み重ねがボランティアに対してある種のフィルターとして働き、特定の個人との関係を続けられなくなったことも事実である。前章の第 6 節で述べているように、家族や友人の間でボランティアとの関係が引き継がれ、両者の関係はさらに深まっていった。両者の間でより日常的なかかわりが増え「家族」のような関係へと変化していったことで、ボランティアと新しく関係を築こうとする人はその関係の維持が困難となる場合もあると考えられる。

第 4 節 ボランティア活動と労働の違い

東日本大震災は第 1 章第 1 節の表 1 で示したように多数の犠牲者を生み出した。加えて、家屋の被害も著しく長期の避難生活者も多数存在した。その結果、生産活動に従事できる人が減少し、その生産活動に対してボランティア活動が必要であったと考えられる。

このような事情があったため、NICE は個人向けのボランティア活動を行っていたのではない。実際に筆者はカキを養殖している個人(H 氏)と農協が運営する農園の生産活動の手伝いをした。しかし、先行研究では被災直後の緊急事態が収まり生産活動が再開し始めた段階での無償のボランティアに対しては批判的な見方がある。阪神・淡路大震災後のボランティア活動を研究した高橋ら(1995)は、被災地の支援が進み、ボランティア活動が安定してきた段階を撤退・地域定着化期と呼び、その段階では「ボランティアの活動領

⁶⁷ KT、2016 年 6 月 15 日、KT 氏宅にて。

域の多くは、被災地の商店、飲食店、医療機関、建設会社等の仕事と競合するようになる」（高橋ら 1995 : 135）と指摘する。ボランティア活動だけでなく無償の支援物資が地元の商店の経済活動に影響を与える可能性もある（マクジルトン 2013）。

一般的にはボランティアは無給で行うものであると考えられるが、実際には実費や謝礼などが支払われることもある（小野 2005）。小野はそのような有給ボランティアは労働市場を混乱させると指摘する。また、前田（2005）はボランティアの生活が仕事と両立することが困難であるならば、ボランティア活動を仕事にできるような仕組みが必要だと指摘する。これらの研究はボランティアと労働力の違いを賃金や報酬の有無や多寡で区別している。しかし、筆者が参与観察中に行ったカキの養殖や農園でのトマトの手入れの経験からは、ボランティアと労働力の違いに関して異なる見方をすることができる。

カキの養殖において、ボランティアの主な作業は筏から水揚げしたカキの殻の掃除と、掃除したカキを再び筏に吊るすためにかごへの詰め直しを行う。この仕事で重要なことは、カキの大きさや形に応じて 4 種類に分けることである。その仕分けが非常に難しく、ボランティア同士で相談したり、H 氏に確認したりすることもしばしばあった。場合によっては、筆者らが行った仕分けを H 氏がチェックしたり、カキの仕分けを H 氏自身がやりなおしたりすることもあった。H 氏にとっては二度手間である。それも 1 度や 2 度ではなかった。だからと言って H 氏はボランティアを断るようなことはなかった。その理由は、H 氏は労働力としてボランティアを捉えていたのではなく、別の要素を重要視していたからだと考えられる。

H 氏がボランティアをどのように見ていたのかを考える上で重要な出来事が 2 つある。1 つは H 氏から受け取る「頂き物」である。H 氏はボランティアが訪れると毎回魚介類をわけてくれた。外国人ボランティアが食べたことのない魚介類が手元にあれば、その場で捌いて食べさせてもくれた。その時 H 氏は「せっかくここへ来たんだから」と口にしていて、また、ブログでは、H 氏がボランティアを自宅に招きカキをご馳走している様子の写真が載せられている⁶⁸。その時のことについて当時のボランティアは、H 氏は「利益よりも広田のカキを多くの人に食べてほしい」という想いがあるとブログに書いている。もう 1 つは、ボランティア活動中に H 氏が過去のボランティアの話をしてくれたことである。例えば、ある外国人のボランティアが船上での作業中に泳ぎたいと話しかけてきたので、船に備わっているクレーンで吊るし飛び込みさせたことや、NICE の陸前高田市のボランティア活動がきっかけで、岩手県で就職した人が休みの日には会いに来てくれることなどである。こうした出来事から、H 氏はボランティアが行う作業の出来や仕事よりも、交流を重要視していたのではないかと考えられる。

トマトの手入れは、農協の管轄する農園での作業の 1 つで、主な作業は葉かきや脇芽取り、蔓おろしなどである。葉かきはトマトの苗の下部にある不要になった枝を取ることであり、脇芽取りは本体の苗と枝の間から出てくる芽を摘むことである。蔓おろしは伸びた苗を一定の高さまでおろすことである。葉かきや脇芽取りは実や苗に栄養がいきわたるよ

⁶⁸ NICE-ナイス-東日本大震災特別復興ワークキャンプ「10/30 カキフリーヤー」、2011 年 10 月 31 日
http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/388f9ff51d22462537f57dd075b80600（2016 年 12 月 22 日閲覧）

うにするためであり、蔓おろしは伸びた苗が垂れ下がり折れないようにするためである。この農園の活動はアルバイトの人と一緒にだったことから、ボランティアと労働力の違いについて考える機会となった。筆者らはこれらの活動を1日でできるようになり、やり方を教えたIH氏も感心するほどだった。前節でも述べたが、作業を教えてくれたIH氏は筆者らがすぐにやり方を覚え取り組んだことで、農園でアルバイトとして働いている人たちも感心しこれまで以上に働いてくれるようになったと話した。トマトの手入れだけを見るとボランティアとアルバイトはほとんど同じ作業をし、その違いは賃金の有無だけのようにみえる⁶⁹。しかし、実際に参与観察をしてみるとそれぞれが結果として果たす機能が異なると感じた。アルバイトは決められた時間働いて農園の作業を進めることが目的であり結果として求められる機能である。一方ボランティアは作業を手伝うことが目的ではあるが、結果として果たしているのは関わる人たちに対してポジティブな影響を与えることなのではないか。農協のKT氏や農園のIH氏だけでなく、一緒に作業をするアルバイトの人たちにも影響を及ぼしていたことはそれを示唆している。ボランティアとアルバイトを賃金という外形的な部分で区別するのではなく、それぞれが仕事や関係する人たちに及ぼす影響という点から見直す必要があるのではないかと考える。

東日本大震災のような大規模な災害では、高橋ら（1995）が指摘するようにボランティア活動が地元の経済活動と競合しないように、いつどのように撤退するかは重要である。しかし、NICEは陸前高田市での活動を少なくとも10年という長期にわたって行うと考えている。すなわち、災害復旧が終わり日常的な生活が戻ってきたとしても、ボランティアは必要だということである。筆者が経験したように、トマトの手入れではボランティアがアルバイトに影響を及ぼしている。同様に福祉施設で活動するボランティアと福祉施設の職員や農業や漁業を手伝うボランティアとアルバイトのように、仮に同じ作業だとしてもボランティアが受け入れ社会で果たしている機能は異なるのではないかと考える。参与観察の結果は、ボランティアの撤退を自立という視点だけから捉えるのではなく、ボランティア活動が労働と重なり合うなかで構築されるボランティアと受け入れる側の関係やボランティアが受け入れる側に及ぼす影響を考えることも必要だと考える。

本章では、第2章のインタビューで明らかになったNICEのボランティアと受け入れる側が実際にはどのような関係であるのか、何らかの問題が起きているのかを、NICEのボランティアとして2015年、2016年のボランティア活動に参加しながら記録した内容をもとに明らかにした。次章では、第2章、第3章の調査内容をふまえ本研究の結論を述べる。

⁶⁹ 無論アルバイトとボランティアにはいくつかの違いがある。1つは、労働時間である。ボランティアはアルバイトと同じ時間に作業を始めるが、終わる時間はボランティアは15時頃であるのに対し、アルバイトは17時までである。もう1つは、アルバイトはボランティアが行った葉かきや脇芽取り、蔓おろしに加え、トマトの収穫も行っていた。また、IH氏も同じくアルバイトであるが、IH氏はブロックごとにわけられた農園のうちの一か所の水やりや農薬の管理も行っている。

第4章 ボランティアと受け入れる側の関係の構築と変化の考察

第2章、第3章ではそれぞれインタビューと参与観察をもとに、NICE のボランティアと受け入れる側が、東日本大震災が起きた2011年3月から2016年8月までの間にどのような関係を構築し、変化していったのかを整理した。これらが陸前高田市でのNICE のボランティア活動の全てではないが、おおよそどのようにボランティア活動が始まりどのように行われてきたのか、その時々で起きた出来事やトラブルなどを明らかにすることができた。これらをふまえた上で、本章では本研究の結論を述べる。

本研究の目的は、ボランティアと受け入れる側の関係を、贈与論を1つの分析軸に据えた上で、5年間という長いスパンで両者の関係の構築と変化を捉えることである。それによって、ボランティアは受け入れ社会にどのような影響をもたらすのかを明らかにしようとした。そのために、東日本大震災によって甚大な被害を受けた陸前高田市で、震災直後から2016年の時点でもボランティア活動を継続しているNICE を事例とし、震災当時の状況を知る人へのインタビューと参与観察をもとに分析したところ次の3点が明らかになった。1つ目は、「ボランティア活動と贈与によって構築される関係」について、2つ目は、その関係が作られる時、ボランティアと受け入れる側の間に立った「『仲介者』が果たす役割」について、3つ目は、長期的な支援が行われるなかで問われる「ボランティア活動と労働の違い」についてである。

まず「ボランティア活動と贈与によって構築される関係」から述べる。すでに先行研究で述べられているように、ボランティアと受け入れる側は贈与を通して人間関係を構築し、活動を円滑に進めていることが本研究からも明らかになった。しかし、活動のスタート時から5年という長期間で考えた場合、ボランティア活動という贈与に対する受け入れる側からの返礼を受け取ることによって「受援力」を高めるだけではボランティアと受け入れる側の関係を十分に説明できない現象が見られた。例えば、震災直後にボランティアが「火事場泥棒」と同じに見られるような強い不信感が存在している場合は、贈与による関係を構築するのは困難である。そこでは後述する「仲介者」の存在が大きい。また、活動が長期化するなかで、ボランティアは受け入れる側からの返礼に申し訳なさを感じ、次第にそれに対する返礼をするようになる。受け入れる側からの返礼が、ボランティアにとって贈与と捉えられ、ボランティア側が食事を用意するなど通常のボランティア活動ではない新たな返礼を行うことでモースの指摘する「循環」が起き、両者の関係は安定化することがわかった。

外国人ボランティアの受入の長期化もその意味を変化させている。震災直後は、世界中から多くの支援が寄せられ、特に注目されたのはこれまで「支援される側」だった開発途上国や新興国の人たちからの多額の募金や支援物資であった。これについては、贈与論の「お返し」として説明することが可能であろう。しかし、筆者が参与観察した震災から4、5年後にボランティアとして参加した若者たちは、被災地の支援以上に、日本の文化に対する興味関心を動機としていた。贈与論や国内の災害時のボランティア活動とは異なる分析軸を考える必要がある。

長期的なスパンでボランティアと受け入れ側の関係を分析してみると、これまで述べてきたように基本的には贈与の関係が活動の円滑化につながっていると考えられるが、それ

でも支援に関わる人たちの関係をめぐって問題は生じていた。そうした問題から明らかになったのは、贈与の循環を通して作られる人間関係が持つある種の閉鎖性である。場合によっては、良好な人間関係がそのなかだけで継承されることでその人間関係の輪が更に強化され、良好な関係のなかに入っていない人とは関係を維持できなくなってしまうこともある。贈与の関係は全ての関係者を包摂するわけではない。

贈与の関係が成立しにくい状況で、ボランティアと受け入れる側の信頼関係の構築に一定の役割を果たしていたのは「仲介者」である。「仲介者」はボランティアを受け入れる側にいるものの、直接支援を受ける対象者ではなく、支援を受けるかどうかを判断する存在である（スレイター 2013）。スレイターは自身の所属する団体の支援が断られたことに対して、「仲介者」が市の職員という行政の立場であったため支援の公平性の観点から断ったのではないかと指摘している。支援のゲートキーパー（門番）としてこうした「仲介者」に対して批判的な見方もあるが、本研究では「仲介者」の存在が、前述したような受け入れる側に広がっていたボランティアに対する不信感の払拭に大きな貢献をしていた。

「仲介者」がボランティアの手配の仕方を工夫することで、徐々に受け入れ側の信頼を獲得していった。もっとも、こうした「仲介者」をいかにして得られるかという疑問が生じるが、筆者の調査結果からはボランティアのひたむきな姿勢に対する共感が 1 つの要因であると考えられる。

贈与の関係がボランティアを受け入れる側の尊厳を守り対等な関係を作ると言われているが、それと同じような効果を果たしていたのが「傍に寄り添う」という姿勢である。「傍に寄り添う」ことでニーズ調査が乱立するなかで被災者の負担を軽減すると同時に、ボランティアがあからさまに何かをしてあげるという態度を出さずに被災者の近くで話を聞いていることが、受け入れる側との対等な関係を作り、場合によっては受け入れる側の要望を聞く機会にも繋がると考えられる。

最後に、長期的な支援は、ボランティア活動が労働と競合する可能性を示唆し、ボランティア撤退の議論を誘発するが、本研究の対象である NICE ではそうした議論はなかったと考えられる。その意味を参与観察から分析すると、作業内容が極めて類似していたとしても、ボランティアと労働者では果たしている機能が違うという点があげられる。そもそも、被災地かどうかと関係なく、NPO や福祉施設では職員とボランティアの両方が似たような作業に従事している。一見するとボランティア活動が労働のように見える場合でも、ボランティアは労働者とは異なる効果を与えることもあったと考えられる。

本研究では、NICE が行ってきたボランティア活動を通してボランティアと受け入れる側はどのように関係を構築し変化してきたのかを明らかにした。ただし、その関係の構築と変化は NICE の UE 氏と受け入れる側の視点からであり、活動していたボランティアの視点が不十分であるということは否定できない。その視点を補うためにボランティアが書いたブログ記事を参照したが、実際に当時のボランティアから話を聞くことで彼らの視点から受け入れる側の関係の構築と変化を描くことができたと思う。しかし、先行研究では贈与論を利用したボランティアと受け入れる側の人間関係の構築に焦点を当てていたことに対し、本研究では震災直後から 2016 年までの約 5 年間のボランティアと受け入れる側に焦点をあて両者の関係構築の始まりから時間とともに変化する関係を明らかにし、両者が良好な関係を築きながらも起きてしまう課題を明らかにできたことは意義があったと考え

る。

参考文献

- 渥美公秀『ボランティアの知—実践としてのボランティア研究—』、大阪：大阪大学出版、2005年。
- 『災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミクス』、東京：株式会社弘文堂、2014年。
- 石井布紀子「災害ボランティア」、柴田謙治・原田正樹・名賀亨編『ボランティア論 - 「広がり」から「深まり」へ - 』、pp123-137、岐阜：株式会社みらい、2010年。
- 岩手県『岩手県東日本大震災津波の記録』、岩手：岩手県、2013年。
- 内尾太一「東日本大震災の公共人類学事始—宮城県三陸地方における被災地支援の現場から」、『文化人類学』、vol78、pp90 - 110、2013年。
- 小野晶子「「有償ボランティア」という働き方—その考え方と実態—」、『労働政策レポート』、vol3、独立行政法人労働政策研究・研修機構、2005年。
- 北田鶴士「「奉仕活動」問題にボランティアを問う」、『日本ボランティア学会 2000 年度学会誌』、vol2、pp104-111、2001年。
- コーリヤ佐貫・葉子「ボランティア・アシスタントの海外大学日本語コース参加」、『日本ボランティア学会 1999 年度学会誌』、vol1、pp122-129、2000年。
- 坂田悠江「なぜ災害ボランティアを続けるのか—宮城県の離島における一事例研究」、『東北人類学論壇』、vol13、pp188 - 204、2014年。
- 澤佳成「被災地をめぐる自立および共生概念の考察—災害ボランティアの事例を中心に」、『日本ボランティア学会 2006 年度学会誌』、vol7、pp128-146、2007年。
- 社会福祉法人陸前高田市社会福祉協議会『東日本大震災記録誌』、岩手：社会福祉法人陸前高田市社会福祉協議会、2016年。
- スレイター、デビット、森本麻衣子訳「ボランティア支援における倫理」、トム=ギル・ブリギッテ=シテガ・デビッド=スレイター編『東日本大震災の人類学—津波、原発事故と被災者たちの「その後」』、京都：人文書院、pp63-97、2013年。
- 添田祥史「ボランティアによる識字学習支援の可能性と限界性—学習者とスタッフの関係性に着目して」、『日本ボランティア学会 2007 年度学会誌』、vol8、pp132-152、2008年。
- 高橋成子・吉井博明「阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の今後と課題」、『総合都市研究』、vol57、pp125-140、1995年。
- 中嶋充洋『ボランティア論 共生の社会づくりを目指して』、東京：中央法規出版、1999年。
- 原田隆司『ボランティアという人間関係』、京都：世界思想社、2000年。
- 福島慎治「ボランティア教育の現状と課題」、立田慶祐編『参加して学ぶボランティア』、pp50-66、東京：玉川大学出版部、2004年。
- 前田博子「ボランティア活動における若者への期待と陥穽—ユーススポーツの指導者に関する事例研究」、『日本ボランティア学会 2003 年度学会誌』、vol5、pp80-96、2005年。
- 前林清和「災害ボランティアの心得と心のケア」、神戸学院大学学際教育機構防災・社会

貢献ユニット編『東日本大震災ノート 災害ボランティアを考える』、pp23-32、京都：株式会社晃洋書房、2012年。

マクジルトン、チャールズ、池田洋子訳「支援を拒む人々-被災地支援の障壁と文化的背景」、トム=ギル・ブリギッテ=シテータ・デビッド=スレイター編『東日本大震災の人類学—津波、原発事故と被災者たちの「その後」』、京都：人文書院、pp38-58、2013年。
モース、マルセル、森山工訳『贈与論 他二篇』、東京：株式会社岩波書店、2014年。
陸前高田市『陸前高田市東日本大震災検証報告書』、岩手：陸前高田市、2014。
山本浩史「施設におけるボランティアの受け入れとコーディネーターの役割 - 介護保険施設の現場から」、『日本ボランティア学会 2002 年度学会誌』、vol4、pp94-113、2003年。
山本浩史「ボランティア原理と施設ボランティア—高齢者福祉施設におけるボランティアコーディネートを通して」、『日本ボランティア学会 2003 年度学会誌』、vol5、pp118-129、2005年。

ブログ

NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「4/15 成長痛」、2011年4月15日、http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/81cd048e0d07db33e29843d83909ed1a (2016年10/2 参照)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「4/16 折り返し」、2011年4月16日、
http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/48fcfd356e45dc5414c8fb9ac94704e (2016年11月25日閲覧)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5/3 それぞれの旅立ち」、2011年5月3日、
http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/e8300bb32e460544f7ca16eb497adcc1 (2016年11月25日閲覧)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5/7 満天の星空から」、2011年5月7日、http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/56aef06b303955a48741d0b0402246e1 (2016年10月5日閲覧)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「八戸出身の私ができること」、2011年5月12日、
http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/5c7db0748e4562e33ca4c651c63165e0 (2016年10月5日閲覧)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「5月23日(1日目)」、2011年5月25日、http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/4428ca37edc8e40ae183803f69ce12bf (2016年10月5日閲覧)
NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「明日から10月」、2011年9月30日、http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/479126e0efb9aff5cbcd71e916f2d428 (2016年12月26日閲覧)

NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「10/19 何か返せるように」、2011年10月19日、

http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/d0ae0dedb515d5d55285fc4718ced929 (2016年12月26日閲覧)

NICE - ナイス - 東日本大震災復興特別ワークキャンプ「10/30 カキフリヤー」、2011年10月31日、http://blog.goo.ne.jp/nice_rikuzen/e/388f9ff51d22462537f57dd075b80600 (2016年12月22日閲覧)

ホームページ

総務省統計局「平成13年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/kodo/pdf/vol.pdf> (2015年11月26日閲覧)

総務省統計局「平成18年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/gaiyou.pdf> (2015年11月26日閲覧)

総務省統計局「平成23年社会生活基本調査 結果の概要」

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf> (2015年11月26日閲覧)

文部科学省「第3章 道徳」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/dou.htm (2016年5月9日閲覧)

文部科学省「第5章 総合的な学習の時間」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm (2016年5月9日閲覧)

総務省消防庁「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）被害報【最新】」

<http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/154.pdf> (2016年12月19日閲覧)

全国社会福祉協議会「社会福祉協議会とは」

<http://www.shakyo.or.jp/about/index.htm> (2016年12月24日閲覧)

全国社会福祉協議会「東日本大震災 災害ボランティアセンター報告」

http://www.shakyo.or.jp/research/2011_pdf/11volunteer.pdf (2016年12月20日閲覧)

全国社会福祉協議会「災害時のボランティア活動について」

<http://www.shakyo.or.jp/saigai/katudou.html> (2016年12月24日閲覧)

農林水産省「グリーン・ツーリズム都市と農村漁村の共生・対流」

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/index.html (2016年11月9日閲覧)

NICE「プレワークキャンプ ～NICE 事前研修～」

http://www.nice1.gr.jp/topics_detail9/id=4844 (2016年12月24日閲覧)

外務省「諸外国等からの物資支援・寄付金一覧」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/saigai/pdfs/bussisien.pdf> (2016年12月1日閲覧)

一般社団法人国際開発センター「IDCJの概要/組織図」

<http://www.idcj.or.jp/about/index.html> (2016年12月1日閲覧)

一般社団法人国際開発センター「東日本大震災への海外から支援実績のレビュー調査」

<http://www.idcj.or.jp/pdf/idejr201201.pdf> (2016 年 12 月 1 日閲覧)
JANIC「日本の国際協力 NGO の被災地支援」
<http://www.janic.org/activ/earthquake/map/index.php> (2016 年 12 月 1 日閲覧)
国際交流基金日米センター「日米センターとは」
<http://www.jpf.go.jp/cgp/about/index.html> (2016 年 10 月 20 日閲覧)
国際交流基金日米センター「日米センター事業報告」
http://www.jpf.go.jp/cgp/info/report/report_05.html (2016 年 10 月 20 日閲覧)
北限の茶を守る気仙茶の会「北限の茶を守る気仙茶の会とは」
<http://kesencha.exblog.jp/i2/> (2016 年 11 月 10 日閲覧)
北限の茶を守る気仙茶の会「活動報告(茶園管理)」
<http://kesencha.exblog.jp/i5/2/> (2016 年 11 月 10 日閲覧)
寿限無亭「男の居場所」
<http://www.geocities.jp/pmckw406/> (2016 年 11 月 11 日閲覧)